

『祝本狂言集』 : 翻刻と解説

永井, 猛

---

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

116

(終了ページ / End Page)

157

(発行年 / Year)

1987-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020378>

## 『祝本狂言集』——翻刻と解説——

永井 猛

本稿は、<sup>野上 記念</sup>法政大学能楽研究所鴻山文庫蔵の『祝本狂言集』(仮称。写本一冊)の翻刻を主目的とし、それに若干の解説を添えたものである。

## 〔翻 刻〕

## 凡 例

一、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、底本の字体に癖が顕著で、「あ」と「め」、「よ」と「に(尔)」と「わ(王)」、「せ」と「や」など、字形だけでは判定しにくい曖昧な文字が多いため、前後の文意から推断して読み方を決定せざるを得なかったケースがすこぶる多い。

一、底本本文の特異性と印刷上の制約や通読の便宜を考慮し、左の方針に従って校訂した。

1、文字づかいは底本どおりとし、混用されている片仮名も

そのまま生かしたが、漢字の異体字や旧字体は通行の字体や新字体に改めることを原則とした。ただし「哥」「嶋」のみはその形を生かし、合字の「𠂔」は「より」とした。また、頻出する太郎冠者の「太郎」は底本すべて「大ら」で、次郎冠者も「次ら」か「二ら」であるが、それは「大郎」「次郎(二郎)」とした。平仮名ではあるが常の「つ」とは使い分けて促音や破擦音の表記に使用している片仮名に近い字体を、すべて「ッ」とした。

2、句読点・返点、および濁点・半濁点・並列点を加えた。底本にも稀に濁点があるので、校訂者の付した濁点と区別するため底本に濁点のある文字は「が」「で」など左に線を引いて置いた。

3、セリフのまま記載していると認められる本文は「」で括ったが、底本が頭部にへ印を付している問答や歌詞の部分(稀に地の文も混入している)については、末の「」だけにしたが、へのある問答が連続してその必要のない場合

はそれを省略した。

4、墨線などによる消去部分は、消去だけの所は「」で括って本文の一部として翻刻し、修正の文句が加えられている所は、修正文句を本文として採用し、消去された文句は「」で括って小字で傍記した。

5、行間の補筆や傍記された注記の類は、底本に丸印で入れ場所が指示されている分(丸印は省略)など、本文に加えて得るものは( )で括って本文に入れ、本文に加わらないものはそのまま行間に小字で加えた。ただし、一度書いた文字が曖昧なのを明示した類の同字の傍記は無視した。

6、汚損・朽損や墨減などによる判読不能部分は、推定字数分の□を当てた。

7、底本は総じて悪筆に属し、判読困難な文字や誤写らしい文字も少なくはないので、底本訂正部分の説明、衍字、難読文字や誤写の推定などをへ▽で括って傍記したり、?を添えて曖昧な字体であることを示したりした。へ▽で括った部分はすべて校訂者の付加である。

8、底本の曲名(内題)の上部にある付箋(所蔵者が見出しとして添えた曲名またはその略記で、切断されて上の文字が欠失したものが多し)は「徳」の形で加えた。

9、改頁部分は「ニョオ」の如くし、そこで改行した。

一、底本の巻頭の目録には誤り(⑤と⑥が逆)や脱落(②⑤②⑦②⑧②⑨)があるので、実際の記載順に番号を付し、漢字を当てて収載曲を列記しておく。下の数字は本号での頁である。

① 止動方角	118	②① 抜殻	139
② 子盗人	119	②② 成上り	139
③ 盗む雁	120	②③ 膏薬煉	140
④ 飛越新発意	121	②④ 白楽天ノ切ノ謡(間狂言)	141
⑤ 伯母が酒	122	②⑤ 悪太郎	141
⑥ 懐中聲	123	②⑥ 鶉祭ノ間(間狂言)	142
⑦ 賽の目	124	②⑦ 腹不立	142
⑧ 饅頭売	124	②⑧ 芭蕉(間狂言)	142
⑨ 雁磔	125	②⑨ 東北(間狂言)	144
⑩ 附子	126		
⑪ 真奪	127		
⑫ 鬪罪人	128		
⑬ 祢宜山伏 祢宜大黒	129		
⑭ 愛寿忠信(間狂言)	130		
⑮ 子徳人(三番叟の間答)	130		
⑯ 盆山	131		
⑰ 舎弟	132		
⑱ 萩大名	134		
⑲ 察化	135		
⑳ 柑子	137		

## 狂言集 (表紙題簽書名)

- |            |             |
|------------|-------------|
| 一、しだうはうがく  | 一、くじざい人     |
| 一、子ぬす人     | 一、ねぎ大こく     |
| 一、ぬすむがん    | 一、あいじゆたゞのぶ間 |
| 一、とびこゑしんぼち | 一、子どく人      |
| 一、くわいちうむ子  | 一、ぼんさん      |
| 一、おばがさけ    | 一、しやてい      |
| 一、さいのめ     | 一、はぎ大名      |
| 一、まんぢううり   | 一、さつくわ      |
| 一、がんとぶて    | 一、かうじ       |
| 一、ぶす       | 一、ぬけがら      |
| 一、しんばい     | 一、なりあがり     |
| 一、白楽天ノうたい  | 一、かうやくねり    |
|            | 一、鶉のまつりノ間   |

しだうはうがく

一、先大名出テ、大郎くわじやよび出シ、此中方々遊山成由言テ、扱今日此山のあなたへ各御出候間参候由申、「左候へバ茶をくらべ申候が、それがしのつめ申候つぽあしく候て茶ノ色そこね申候。おぢであるものゝ方へいて、つぽともに茶をかりて

まいれ」といふ。大郎、「次郎被レ遣いや」といふてぢたい申候へ共、「いやなんじあいくちにてある間まいれ」といふてやる。「畏て候」とてまいる所で、「又今一色申付る事ある」といふ。「何事にて候」と大郎言。「ミなくたちを」

もたさしらるゝ。左候へバ、なんじ存たるとく其れがしのたちあまりミぐるしい事じやほどに、とてももの事ニたちもかつてこい」と言付る。いろくぢたいあつてかりに行。「又今一色申付る事がある」と大名いふ。「各き馬デ御座るが、なんじがしつたごとく馬をもたぬ程に、馬もかつてこい」と言付る。是非ニ不レ及、おぢごへかりに行。かりに行、シカく有テ、三色共ニかり出ス。はじめ茶つぽ、又たち、のちに馬をかる。おぢ、馬かす時に、

「此馬ハすハぶきすればはねる」。はねぬぢゆもんおしゆる。「ぢやくれんどうじ六万ぼさッ、しづまりたまへ、しだうはうがく。此ぢゆもんとなへバはねぬ」とおしへて、大郎帰る。帰て、大名よろこぶ。扱大名のせて、「此つぽハ何といたそ」といふ。「もて」と大名言。其時ふしやうがほする。一へんまわりて、大郎はらたて、「ちとおとそ」といふて、馬の尻へよりてすハぶきする所で、大名おつる所を、大郎たち・つぽを下ニ置、馬をとらゆる。大名、「なんじがあまりちかく参候間馬おどろ

くほどに、今度ハあとよりこい」と

『3オ

いふ所で、はるかにあとにゆく所で、又大名「あまりあとにて候間今少ちかく参れ」といふ所で、又そこでちかくより、馬よりおとす所デ、又つぼ・たち下ニおいて、又じゆもんとなへて馬をとらゆる所デ、大名「なんじが跡よりまいればおつる程に、今度ハさきへ参れ」といふ所で、そこでさきへとつくとゆく所で、又しう「やい／＼大郎くわじや。それハあまりはやく候間、今度馬のちかく行け」といふ所で、又馬の』

3ウ

まつそばに居る。あまりそれハ馬のそばなる由言テしかる所で、大郎はら立テ又おとす。三度おちて、もはやのるまじき由いふ。

「したら馬をなんと仕る」といふ。「引てこい」。「引てまいろが、此たち・つぼ何といたそゞ」といふ。「それならバのツてこい」。

「のりまする事はなりますまい」などといふて「引てこい」といふ。のツて「此たち・つぼなにいたそゞ」といふ。

「馬ノ上デもて」といふ。「われてもくるしう御座るまいか」といふ所で、れうけんなくして大名つぼ・たちもつ。

『4オ

さてもたせて、大郎のり候て、是ハ慮外千万なる由言。扱大郎「ついに人のしうニなりたる事なく候間、此度馬にのり、たち・つぼをこなたへもたせて候ほどに、一代のおぼえにしうの心を仕りたいが、いかゞ御座ろぞ」といふ。大名、「あたりに人ハ

なく候間くるしからず。いそいでしうの心持をせよ。それがしあまたにこたよう」。そこで「あるかやい」といふ所で、大名「御前に候」といふ。そこでわらふて、「こい／＼、とツとこい／＼」といふてしかる所で、

『4ウ

そこでしう「ざれ事ニこそしうになれといふたれ。めぎくらぎしをツてにくいやツじや。いそいでおりおる。それがしゆる」といふてのる所で、そこで大郎、「無用の、又おちよとおもふて」と大郎言。さてのせておいて、「今度ハあらけなふおとそ」といふて、すハぶききつくして馬よりきつくおとす所で、馬ハがくやへかけていぬる。大郎ハ大名ニのる所で、大名「それがしじやといふてしかる所で、「御免被レ成候へ」とつむる。』

『5オ

### 盗

子ぬす人

一、ふうぶづれにて茶をのミニ近所へゆくとして、おとこさきへいで、女をよびいだし候。女、子をだきて出候。「其子をねさせてこい」といふて、ねさせてがくやへ居る。そこでぬす人出て、へいをのりこゑ、ぬす人ニいりて、家居ざしきいろ／＼ほめて、さて子をミつくる。ミつけてあいをして居る所へ、女さきへかへり、「なふ／＼ぬす人入候」由言所で、男かたなぬき、あちこちへおいまわし候時、たちうちつけ候へバ

『5ウ

子をさしだし候時、女めいわくなるかをして二人ノ中へ入、いろく取付。はしがよりへおいまわされ候て、子をうちつけ、おいこミニいる也。

ん  
ぬすむがん

一、大名出テ、「長々在京仕候。そしやう相かない、本地被下るのミならず、しんちまではいりやう仕ツた。さあれバ御暇出候間、国本へ罷下」と言。あさうノごとくニ。「大郎、馬ニのせう」、又「馬ニのるまで牛ニのせう」などゞざれ事言。「扱此中

』<sub>6</sub>オ

方々へ被召寄候事、おびたゞしき事ではないか。暇ごいニそれがしも各をふるまをふと存ずるが、いかゞあるぞ」といふ。「何ぞさかなハあるまいか」。「いや、なにも御座らぬ」といふ。大名「町へいて何成共もとめてこい」といふ。大郎「かわりハいかゞ御座ろぞ」といふ。「いや、それがしが用じやといふてとつてこい」。「いやくおくにでこそさやうニ申て人ががてん仕ろづれ、ミヤこなどでハさやうニ申ても中くがてん仕るま

』<sub>6</sub>ウ

大名「先いて、なにくあるぞミてこい」といふ。そこで行。扱がんのミる。『<sub>6</sub>ウ』此がんにくらぞ」といふ。ていしゆ「貳百疋

デ御座る」。やすくねぎてまけぬ所で、「貳百疋ニかを」といふ。「さらバとらしられよ」といふ所で、とつて「さらバく」と言てにぐる所で、がんのうりてとらゆる。「いやそれがしをゑしらぬか」といふ。「いやしらぬ」といふ。「いやそれがしハたのふだ人の大郎くわじやにてあるがしらぬか」。「いやしらぬ。だれでもかわりが

』<sub>7</sub>オ

なければがんハやらぬ」といふ所で、大郎「さあらバ此がんのたなおひきやれ。たゞ今かわりもつてまいろ」といふて帰る。さて帰て、しうにあふて、「がんに御座る」。「とつてきたか」。「いやかわりをもつてまいらず候間おこし申さず候」由いふ。「それがしが物じやといふてなぜにとつてこなんだ。ぬるいやツじや」といふてしかる所で、大郎「おもいだしたる事の候。今のがんのたなをひけと申て御座る。さりながらあき人の』<sub>7</sub>ウ事で御座るほどに、うりたく存てたなをひかずに其まゝおきましょ。しかる程に、それがし貳百疋ニ代なしておきまして御座るほどに、こなたのいかにも大名ぶつて御出あつて、三百疋ニねをつけさしられい。所であれがうりませう程に、其時それがしよい時分ニまいつて、それがしがねをしてあるほどに、いづ方へもうらせまいと申さう。又こなたハこなたへかわしられうとおしられう。

』<sub>7</sub>オ

そこでそれがし、そなたこそ大名にてある共、それがしハ何共  
不レ存候といふてけんくわ仕る所で、あれが中ばいニ入ましょ。

そこでさんぐニけんくわしなしまして、どさくさといたす其  
ままぎれれにそれがしがんのつツととツてのきましょ。大名「一段  
可レ然らう。そのミせハいづ方ぞ」といふ。「是より東へ御座て、  
かどをきりりとまわツて其二間めの家デ御座る。」「さらバ」と  
いふて

大名いで、がん見付テ、いかにも大名ノやうニなまつて「三百  
疋」といふ。其ねにかう所へ大郎出テ、いろくけんくわニ成  
所で、どさくさまぎれニがん取テ、大郎にぐる。扱ていしゆあ

きれている。さて大名婦て、「どれ、してきたか。ミせい」とい  
ふ所で、大郎「こ「どさくさまぎれにこなたも」なたのも御ミせ候へ。」「何を」と大名いふ。

「いや、なかくさしられそ。それがし存て御座るぞ。」「いや何を  
いやい。」「どさくさまぎれニたなへつツと手をあげさし」ウオ

られた。それをミせさしられたらバがんも御めにかけませう。  
「しかとミたか。」「中く。」「はづかしい事じゃ。なミせまい  
とおもへども、なんじがてもとを見たといふほどに、さらバミ  
せう。それがしもさかしほにせうとおもふて、これをしたわい  
やい。大郎「されバこそ申さぬか。それがしがの御「かん」めにか  
け「ママ」けう。」「先ハでかいた。急「ういやッじや」でれうりせい。』ウ

## とびこゑしんぼち

一、先さきへ男出テ、「すぎニ有方へ参る。それがしハ無調法  
ニ候間、こゝニ別テ申談ルしんぼちが御座る。此御方同心申さ  
うとぞんずる」。よび出す。しんぼち出テ、「すぎに参候」由言  
テ同道する。しんぼちしんしやくいたし候へども、いろく言  
テ同心する。路次デすきの様子などおしゆる。「別ノ事ハない。  
先すぎニいてハ路地以下ほむる物で候。尤のせらるゝとハおも  
ひながら、ほめられたハうれしい物じやニよツて、先物ごとに  
ほむる物で候。又すきの大事と

』10オ

いふハ、かりそめながらおしへましょ。かまのにゆる音ハリう  
くくるまうし速波おとなしくしやぎう車牛ゑんんば無音とにゆる物じや。さておしへて、川ミ  
つけて「ミぞ川じや。おとびやれ。とほ」といふて、おとこハ  
とぶ。とんでむかいにいて、「さあ、おとびやれ」といふ所で、  
「一束とびニせう」といふてとぶ所で、むかいて、男「あ、あぶ  
ない」といふてもろでをひろぐる所で、あとばいではらたつる。  
「あぶないといふがはらのたツ事か」といふ。又とぶ所で、「は  
まりやるな」といふて、もろでてひろぐる所で、又はら』10ウ  
たつる。「はまりやるなといふがわるいか」といふ。「いや、そ  
んならもどろ」といふ。「いや、こゝまでおじやッてもどりや

るものか。今度ハはしりとびにめされ。」「さらばはしりとびにせう」といふて、はしがよりよりはしりとびにして川へはまる所で、男わらふ。しんぼちはらたつる。袖をしぼり、みへ水入候て、はらたつる。「おぬしハそれがしをなぶりものにせうとおもふてつれてきたの。」「なんのなぶりものにせうぞよの。」「ぬれねずみの

『11オ』

やうになつてそれですきにゆかるゝものか。」「やれ／＼おかし事じや」といふてわらふ所で、「しておぬしハシツかとわらふか。」「さておかしいほどにわらふハ。しんぼち「おぬしの身のうへにおかしい事があつたらなんとせうぞ。」「やれ、おれが身のうへにおかしい事ハあるまいぞ。」「ていといふてわらわふがな。」「さあ、おれが身におかしい事があらばいふてわらやれ。」「シツかとゆをか。」「あふゆわしめ。」「さらばゆを。去年の

『11ウ』

なつ、四条ノかわらですまふのあつた事おぼへさしまつたか。」「あふおぼへた。」「其時おぬしハ、いですまふとらふとて、ないもせぬひげをくいそらいていでたれば、諸人もすくやかな男じやほどに、いかさまとりてゝあらふなどゝおもふてあれバ、おぬしのあいてにおぬしのまごほどなものがいでゝ、おぬしをさまたにあげてひッしりとうちつけたをミたれば、かいるをうち

ひしやいだ

『12オ』

ごとくに(うちつけられて)、手あしを(ひろげて)ひく／＼とひくめかいて、六月の土用ニあをさんせうをほいたごとくにめを見だいたのをミたれば、今思ひいだせばおかしうてならぬよの。」「わらふ。男「すまふがこゝへ出合事か」といふ。」「出合ハせぬ事なれども、おぬしがいかになりでまごほどなものになげられたを今おもへバ、おかしうてならぬよの。男「シツかとおかしいか。」「あふおかし事じや。」「シツかとおかしくバおぬしと一番とろ。」「

『12ウ』

「おれと一番とろ。おれハすまふとりでハなし。とりたくバおぬしひとりとれ。」「しても、わらふほどにとらう。」「いや、おれハとらぬ。」「せひとろ」といふて、うちたをいはいはる所で、しんぼち跡デ、「すきにつれてゆこといふて、このやうニあたまひたいまるめたものをうちたをいはいのものか」といふて、ないてつむる。

『13オ』

か酒

おぼが酒

一、おぼ先へ出テ、いちへ酒うりに出ル。又おい跡より出テ、「此あたりニそれがしのおぼである物が酒ヲうり、殊外ふツきに御座る。しかれ共、何時ならぬけんどう物で御座て、さい／＼



見舞候へ共、終ニそれがしニさけをくれた事が御座らぬ。今日  
 参り、何とぞおもしろおかしう申て酒をたびようと存る」。お  
 ぼノ方へいて、いろ／＼さし合言テ、「さてこなたのさけハう  
 れまするか。定而ようできまします。それがしのざい所ニ」<sup>13ウ</sup>  
 さい／＼神事が御座て酒が入ますが、こなたノさけハようい  
 できてあるかなどゝたづねますれ共、ついにたべて見ました事  
 が御座らぬ所で、よいともあしいとも申かねますが、少のふ  
 でミまして、以来うツて進上申ましょ」。おぼ「尤おましたいが、  
 けさからうりぞめをせぬ程におまする事ならぬ」といふ所で、  
 ぜひニ不<sub>レ</sub>及、シカ／＼有テ帰る。帰ツて又もどりて、「うりぞ  
 めをなされずバ、それがしをいわ／＼しられい」といふ。「いや  
 〳、おぬしがやうなものハ

『14オ

いやじゃ程に、向後これへくる事無用じゃ」といふ。さん／＼  
 ニいふてもどす所で、帰テ、ふりうのめんノきて、おどいてさ  
 けのふで、「こゝミたらとつてかまふ」といふて、次第／＼ニ  
 さけニ急い、めんをみ／＼のかたにきて(のちに下ニめんすつる)、  
 ねいる所で、おぼミつけて、おいこミニする。

中 くわいちうむ子

一、つねのごとくむこ入する。「何にても(引出物)くわいちう

する」とおしゆる。さてつねのごとくむこ入して(ぢぎあり。  
 「何事も無音事、これのむすめ子に御免候へ」。時ならぬあを梅  
 などくいたがる事も言)。さかづきいづる。しうと

『14ウ

め<sup>への</sup>ふでむこニさす。むこのふでしうとにさす。又しうとのふで、  
 「今一ぺん」といふてむこニさす。其ときしうと「大郎くわじ  
 や引出物」と言所で、弓を取出し、大郎むこニ出す所で、むこ  
 取テ、先<sup>抹漕</sup>たてにふところへいる。いらぬ所で「はながミのご  
 とくいるゝ所で、いらぬ間、又たてにいろ。又いらぬ所で、  
 又右ノ袖口よりいれて左ノ袖口へぬきいだす所デ、し<sup>へうとまひ</sup>〳〳〳〳  
 を所望する。むこ「くわいちうがこわばツてまいがまわれず候  
 間御免候へ」といふ所で、「ぜひ」といふて所望する

『15オ

所で、一さしまう。心持斗まふてさツとむる所で、又しうと  
 「いや／＼あまりにみぢかく候。そのう急あふぎを(取かわし)、  
 さゆふに御まわり候て御まい候へ」といふ。むこ「只今も申や  
 うニくわいちうがこわばり候。其上さすがミがあしう候ほどに  
 御免あらうずるにて候」。「いや／＼、舞ニさすがミハ不<sub>レ</sub>入候間、  
 いそいでまわしられい」。そこで又、「めでたかりける時とか  
 や」。舞まふて、右ノあふぎ口ニくわゑて左へわたし、左ノあ  
 ふぎ右へ渡す時口ニくわゑて渡す。

『15ウ

舞納テ、むこノ方より「今度ハめでたふつれまいニ仕らう」と

いふ。「さらばつれまいニまわふ」としうといふて、もろとも  
に和哥あげてまふ。さて尻ノほこでしうとののはなのさきへつき  
つけくする所で、しうとかほく引て一ぺんまわり、がくやノ  
まくぎわまでにげ入ニする。そこで笛ひしぐ時、むこ「まいッ  
たの」といふてつくばいい、つむる。

のめ

さいのめ

一、うとく人出テ、大郎くわじやよびいだし、「いかにもさんか  
んノたツしたるものをむ子にとらふずる間、高札を  
うて」といひつけて、高札うたする所で、ばくちうちいで、  
「此所にうとくなる人ノ候が、彼人びじんのむすめをもたれて  
候。いかにもさんかんのたツしたるものをむこにとらふずると  
高札をうたれてある。それがしハさんかんハすこしもぞんぜね  
共、おもしろおかしう申てむこにならふと存る」と云て、しう  
との所へ行。ものもをかうて行。大郎くわじやいで合テ、しう  
とへいひ渡し候。さて内へ入、しうとたいめんして、「いかや  
うなる事成共被ニ仰付一候へ」といふ。其時しうと

『16ウ』

「五百具ノさいのめを一さんにおかしられい」といふ所で、い  
ろくしかく有テ、引立テもどす。又あとへ右之ごとくニ言  
テむこの望にて一人来る。是もしかく言テ、引立ル。そこで、

しやうじんのむこ、かみしも・おりゑぼしにて出ル。さてしう  
とたいめんして、右之ごとくニ五百具ノさいのめを一さんニ所  
望する。其時ひやうしニかよりこたふる。「老ニ二千ニ式二千。  
三ニ三千四ニ千。四脱でくノめが五千なれや。上六ハ六千。以上是  
をげッけすれば

『17オ』

式万千とつもツた。やわかちがい候まい、く。爰にてしうと、  
どつとほめて、「さらばひめをつれてまいれ」といふて、大郎つ  
れてきたり、むこに引合候。さてしうとハ「家一跡むすめむこ  
殿ニまいらせ、いんきよする」とて、がくやへいぬる。むすめ  
ハ大じんばしらニ、小袖をかづけ、おとのめんをきせおきて、  
むこたいめんいたし可申とて、いろくしかく有テ、後かつ  
ぎとる時、おとこきもをつぶしにぐる所で、女いろくおいま  
わし、

『17ウ』

う

まんぢううり

一、大名出テ「清水へ参ル」と言テ出ル。かみしも、刀さし、  
大じんゑぼしにていづる。一まわりくたる時分、又まんぢう  
うり出る。くよりばかま、かたぎぬにて、ツツミおけをさげ、  
はしがより「まんぢうハく、おまんハく」と言テ出ル。

大名言葉をかくる。「やい／＼(何事をいふぞ)」と大名ことばかくる。「いや何事も申さぬ」。「いやたゞいまハ何事をいふたぞ」。「いやまんぢうめされ候へと申た」。「それハなにといふものぞ」といふ。「是ハまんぢうにて御座候」。「どれ、ミせい」といふて見る。『18オ

「これハ何のやくニたツものぞ」と大名とふ。「是ハまんぢうと申て、いづれもうへ／＼へきこしめすものにて候。ひとつまいりませい」といふ。そこで大名、「にくい事ぬかす。なんじくへ」といふ。「いや／＼それがしがたべるものでハ御ざない。めしあげらるゝ御方へれうそくでうりまらする」。「先くてミせよ」といふ。「いやそれがしがたべる事ハめいわくにて候」と申す。「何とかわりの事がめいわくなといふか」。「中／＼さやうで御ざる」。「かわりハ心安ぞんじ候へ。いかほど成共なんじがたべた程ハ

かわりをとらせうぞ」といふ。「さらばたべませう」といふてたべる。「いまニツ三ツ御座る」。「よし／＼ミなくへ／＼」と大名言。「さらばたべませう」とてミなたべる所で、大名「よくた、／＼」といふてのく所で、「かわりを被下候へ」といふ。大名「何、かわりを。なんじがくてそれがしニかわりをなせといふ事があるか」。「いやかわりをくだされうとおしられたほど

にたべて御座ル」とて大名ニ取付所で、大名刀ノそりかへし、めぎららぎして大名ハいぬる。<sup>〔する所で〕</sup>まんぢううりあとにて、「人の物くうとおもふて我がものくうた」。なきづめ也。『19オ

ふて がんつぶて

一、大名、上下・大名ゑぼしにて、弓と矢と以てあたりへ野あそびニ出ル。がんをミつけてねらふ。がんハ正面ニおき、大名ハつゞミ打ノまへよりねらふ所へ、くゝりばかま・かたぎぬにて出テ、「此あたりノ者にて候。今日はたを見舞申さう」といふて、してまつのあたりにて、がんを大名ねらふをミて、はしがゝりより「しよしんなるねらいやうや」といふてわらふ。「あのねらいやうでハあたるまい。それがしつぶて」『19ウ

打ころそ」といふて、仕舞ばしらのさきへいで、かたをぬぎ、つぶてにてうちころし、がんをとつてのく。はしがゝりへのきたる時、大名おツかくる時、あつかい人出て、「何事ぞ」といふてきく。大名「それがしががんをぬすむほどにやるまいといふ事じや」。又あどニとふ。「いや、それがしがつぶてにてうちころいて候ほどにとりて参る」といふ。大名又いふ。「それがしがゑたゝぬやうニねらいころいておいたを取てのくほどに、どう

ぼねいちぎツてくれう」といふ。あつかい人「先またしられい」といふてなとめる。さて、あつかい人「どなたへもりひをつけられぬほどに、此がんの

『20オ

さきにいたる所において、大名ニいさせて、あたつたらバおとりやれ。又あたらはずバそなたへおとりやれ」といふ。しかく有テ、本ノ所ニ置、いさする。「あしが出たぞ」などいふ。二度ほど、つかくとはしりかゝりてゐるを、あどおしとめくして、あげくにあしもとへ矢をおとす所で、其まゝあどがんとつてのく所で、大名「やい／＼、せめてがんハ及なし。其はね成共くれい。こぎのこニせうニ」。

す ぶす

一、大名出テ、大郎くわじや・二郎くわじや二人

『20ウ

よびいだし、「去方へ遊山ニ行ほどに兩人る主を仕れ。則此おくのまへゆくな。おくのまにぶすといふ物をおいた。是をくう事ハ申ニ不レ及、此ぶすの風に成共あたれば其まゝ死するほどに、かまいて其分心得ておくのまへはいるな。よくくゝるす仕れ」といふて、大名がくやへいぬる所で、大郎・二郎出テ、大郎いふやうハ、「何とおもやるぞ。おくのまへ行なと申されたハ、いか様子細がある。そうじてそれがしハ、人の行なといふ

所へハゆきたし。又ミなといふものハミたい。此ぶすハちとミたい事でハないか」。次郎「尤さやうでハあれ共、たゞいまのごとくに懇ニ被ニ申置いた程に、中く見る事ハ無用じや。其う

『21オ

ぶすの風にあたりても死すると被レ申たほどに、それがしハ中く同心せぬ」といふ。「さあらバそれがしそとミテこう」といふて、大郎はしがよりあふぎにてあをぎ行。さて行ミテ、「くるしうハありそむないぞ」といふ。さあらバ二郎も兩人ながら行。右之ごとくニあをいで行。さて行ミテ、次郎「何とやらんかほがはるゝやうな」といふ。大郎「いやくるしうない」といふて、又行て、ふすませうじあけて又にぐる。にげて又いで、大郎ぶすのふたをとる。ふたをとつて又にげて又いで、大郎一口ねぶる。ねぶツて「やれこい／＼」といふてよぶ。そこで二郎いで、二人してぶすをばい

『21ウ

よふ。おけノミハ大郎取、ふたハ二郎取。さて二人してねぶツて、二郎「ようめさツたノ。おれが無用じやといふたものをおはிரりやて、あまつさへぶすをミになしやツた。こちやしらぬ」といふ所で、大郎「此けんざんハこれノたから物で、なにと石の上へなげても、かなづちでうツてもわれぬ。いざこれをうちわツておごろじやれ」。二郎「おうそれハ、それがしに打

わらせておいて、たのふだ人ニいおふといふ事か。「いや、中  
くさやうでハない。しぜんこれがわれたらバそれがしがおわ  
ふ程ニ、わッておごろじやれ。「しかとおやるか。「中く」。  
「御せいもんあれ」。「弓矢八まん

『22オ』

それがしがおよ」。「さらばうちわッて御めにかけう」。そこで  
石ノ上へびッしりといふて打わる所で、大郎わらふ所で、二  
郎「おぬしがおよふと〔お〕といふたればそれがしがわッたれ。それ  
がしハしらぬ」といふ。「いや又いかにそれがしがおうとい  
ふたればとて、大事之けんさんノ打わるものか。いや此やうな  
おかしい事ハあるまい」。「しかとおぬしハそのやうなとどかぬ  
事いふか」といふてはらたつる所で、大郎いふやうハ、「さあ  
らバそれがしが分別しだいた事があるハ。たのふだ人のおもど  
りやたらバ、兩人ともにないていよ所で、たのふだ人の『22ウ  
何事ニさやうニ〔お〕ほゑるぞと申されう所で、それがしが申さうず  
るやうハ、別ノ事でも御ざない。おるすニあまりさびしさのあ  
まりニ兩人すまふをとりまして御座れば、あのけんさんノ上へ  
兩人ながらこらふで御座る所で、けんさんがこミぢにわれて御  
ざる。さやうニ御座れば、御帰なされて此由きかしられて御座  
らバ、さだめて兩人ながら御せいばいなされましょ。さやうニ  
御座れば、とても御せいばいニあいませうよりも、あのぶすを

たべて死にませうと存て、二人ながらぶすをたべて御座れ共、  
未死にませぬ。定而頓而死にませうと存て

『23オ』

それがかなしう存てなきまする」。大名「やれく言語道断之  
事言。はいるなといふ所で曲事な事じや。則せいばいせうずれ  
共、せいばいいたすに及べぬ。ぶすをくたらやがてしのぞ。か  
わいやく」といふて大名いぬる。さて大郎・二郎しかく有  
テ、うたいづめニ成ル。へ一口くへどまだしなず、へ二口くゑ  
どしにもせず、へ七口、へ八口、へ九口。同音へ皆になるまで  
くうたれど、しなれぬ事ぞめでたけれ、く」。へそちとこち  
と五百八十年、へ七まわり、二人へさらばく」。

『23ウ』

はい

しんばい

一、大名出テ、大郎よび出し、「明日花ノ会にて候間、花ノしん  
ノ取ニゆかふ。定而しんハふかくさにあらふ〔抹消〕又もとくさハ」ず  
るほどにふかくさへ行ふ。何ぞ道具持せ」。大郎「やいく頼  
だる人ノふかくさへ御座ル。お道具出せやい。じや〔あ〕」。「道具  
とハ何の事で御座るぞ」といふ。大名「それがしが内ニ居テ道  
具しらぬか。弓成共やり成共、なぎなた成共持せよ」。大郎「畏  
て御座る。やいく、弓成共やり成共長刀成共持せと被仰候  
ぞ。じやあ」。太郎「其由申て御座あれば、弓ハつるが御座ら

ず、又やりハゑがおれて御座る。又なぎなたハしやうとく御座ないと申」。大名「そうである。やれく、めでたいおりなれば長道具ハいるまい

『24オ』

ほどに、たち斗もツてこい」。大郎「かしこまつた」。

一、「是ハ此あたりの者で御座る。少人へ花ノしんノ約束仕たほどに以てまいる」とて、はしがりにて名乗。花を以てまわる。一まわりく、見付て大郎をやりて所望する。少人へ約束いたしたるよしいひてやらぬ所で、むりニ可取とて大郎取ニ行。取ニ行時、大名ノたちを以ていて、たちと花とかへて帰る。花取て帰たる時、大名悦。さてたちとられたるを見付て、大郎をしかる。たち取ニ又大郎行

『24ウ』

とて、しうノちいさ刀かりて行。又ちいさ刀とられ候。刀とりたるものハよろこぶ。「もどりニコムもとにいたらバかミ六寸とらふするほどに、かまいてこムもとニ居るな」といふ。「畏て候」とて帰る。さて帰りて、しうニしかられ、「いづ方ニ彼者ハいよぞ」といふ。「帰りニコムもとニいふバ上六寸とらふと申て御座るほどに、今ノあたりでまぢまして、たちもかたなも取返しませよ」といふ。さて、しうも大郎も行所で、彼者そろくいづる所を、はしがりより見付、いろく二人つきたおしやうて、しう取付所で、大郎先はなをしつぺいはじくとてこ

ろぶ。

『25オ』

又なわ取出して、大コノばちにてうツて、さてなふて、「こムへあし入い」といふて、あちこちかけはづし、のちにしうニかけてつむる。

り くじざい人

一、先一人出テ、「神事ノ山を作てい出す番に我等の町が当年あたりて候。皆よび出し、談合申さうと存る」。大郎くわじやよびだし、右之通言テ、「皆よびだし候へ」といひつくる。大郎ミなくよび出して、なミいて談合仕る。「別而大郎さして物にて候間、談合、大郎ニきかせ申まじき」とておい出す。はしがりにて大郎立聞している。いろく「老人ヅムいひてい出す。あるひハ

『25ウ』

竹ニ虎、又ハリやうニ雲、たきニコい、鶴亀、老人ヅム色いひ出し候。老人く「大郎さし出て、「そんぢやうそれハ去年其町ニいで候」。又言出せバ「それハ其町ニ仕たる」などよさし出候。しうハはらを立て、一度くにておい出す。然共、あまりさし出て、ついに談合きわまらず候間、「さらバ大郎くわじやニコのませよ」と皆申され候。しうハ「いやくあのやうなヤツニハ中くこのませまい」といふ。然共「先このま

せて「まじよ」といふて、このまする。大郎ハそこで「ぢたいす  
る。然共、ミナ／＼よりいふ所にて

『26オ』

このむ。「山を作て、其上ニがきをおにがせむる所をつくらせ  
られい。廿四五年より此かた是が御ざらぬ」。皆、「是ハめづ  
らしからう」といふ。然共、しういふやうハ、「いや／＼、わ  
るく御座ろ。おに／＼ハなるものが御ざろが、がきにたれがなり  
ましよ」。そこで大郎、「されバこそ。あのやうな上情のこわい人  
で御座る所で、それがしがちたい申て御座る。それならバ何成  
共このましられい。とてもなりますまい」。又このめどもなら  
ぬ所で、「さあらバ大郎がいふやうニがきニおにをせうが、が  
きにハたれをなさうぞ」といふ

『26ウ』

所で、大郎いふやうハ、「げんぼうニくじ取ニあそばせ」とい  
ふ。「尤」といふて、「さあらバくじをしてこい」といふ所で、  
つゞみおけノふたニ紙を人数程ひねりて大郎もちていづる所で、  
めい／＼一ツツ取てみる所で、皆、ハ「無デ御座る、／＼」  
といふ。大郎ハおにを取。しうハ出しかぬる所で、皆、より  
「ひろげさしられい」といふて、ひろげて見候へバがきにて候。  
其時しうはらを立候へ共、くじ取の事なればぜひニ不<sup>レ</sup>及、が  
きニ成。「先けいこ仕、一せめせめてミませう。こゝハさな<sup>い</sup>  
やうで御座るが、くがいで見るしき事被<sup>レ</sup>成てハいかゞで御

座ろ。

『27オ』

けいこニせめて見ましたらバよう御座ろと存る。「さらバ尤じ  
やほどに、けいこニせめさせて御覧候へ」といふ。そこで、しう  
つへをついて正めんニ居か。大郎仕舞ばしらより、「いかにざ  
い人いそげとこそ」。一せめせめて、しうのうしろをやまする所  
で、しうおいはしらかす所で、ミナ／＼より取つき、色／＼いふ  
て、又一せめせめる。其時ハ「かなぼうしさまのもてあそびのめ  
んが御座る。これをきてせめましよ」。「尤」といふ所で、おに  
のめんをきて、「それぢごくとをきにあらず。ごくらくはるかな  
り。いそげとこそ」。一せめせめて又やまする所で、しう『27ウ』  
おいこみにする。

ねぎ山伏 ねぎ大こく

一、先へ茶や出テ居ル。跡より伊勢のねぎ出て、茶をのふで、  
しか／＼有て、山伏出ル。へかいをもふかぬたぬ山伏が、／＼、そ  
ろ／＼うそをふかふよ。「是ハ出羽国はぐろさんより出たる若  
僧にて候。大ミねかつらき山よりたゞ今かけ出候。そろ／＼  
と国本へ罷下らうと存る。のどがかわくが茶やハないかしらぬ。  
やそニ茶やがある。なふ／＼茶や。茶をたびやう」。『28オ』  
爰でねぎをミつけて、「のけ／＼」といふてねめる。ねぎのか

ぬ所で、山伏ぼうにてねぎのそばをどうづく所で、ねぎしてばしらの方へにげる。さて、ねぎ「山伏にそれがしが何にまけうぞ。山伏のかしませ」といふ所で、又山伏ぼうにてどづく所で、茶やせうしニ存、「いや／＼さやうに御もんど被成た分ですみますまい。爰ニそれがしのひざう仕る大こくが御座る。何ともならぬあらたか大こくにて候。」

『28ウ』

此大こくを是へ取出しま正するほどに、此大こくのつかしられた方をそれがしの上座へなをしましよ。若僧客ハ随分いのらしらしい。又おし殿はずいぶん御きねん被成て、此大こくのつかしらるゝやうに被成ませい。「中／＼。さあらバ大こくを取

『29オ』

「心得ました」といふ。ぶたいのまん中ニ大こく置。山伏ハ大にんばしらよりいのる。又おしハ仕舞ばしらよりいのり候。おしニ付。山伏せわしくいのり候へバ、つちにてやまする。はしがよりへおしに付大こく行時に、はしがよりの中程にて山伏はらをたて、けさをはづし、大こくのくびにかけ、あとへ引たをしてつむる也。

『29ウ』

『寿』

あいじゆたゞのぶ

一、たゞのぶはじめいづる。たゞのぶに、りきじゆゆぼうしにて女したく仕ついて出る也。たゞのぶやどをかる。「たれにて渡り候ぞ」。してへ一夜の宿をかし候へ。「心得申て候。こなたはたれにて渡り候ぞ」。「おくのまへ御とをり候へ」。やどをかしておいて、「ごんごどうだんの事にて候。たゞのぶの行衛しらせてあらバ、望を御かなへあらうとずる行との御事にて候。急此由六はら殿へ申あげうするにて候」といふて、がくやへいぬる。其間に又たゞのぶ

『30オ』

あいじゆが所へ行。さて後にりきじゆ、よせてのあんないしやにて行。先りきじゆ出て、りきじゆがざしきをミれ共たゞのぶいられず候時、りきじゆきもをつぶし、さぐりてミて、「いや、まだ人はだなほどに遠くハ行まじいぞ。こなたへ／＼」といふて、よせてを引つれ行。よせてはしがよりまで出たる時、りきじゆハ大こ打のうしろへはいる。

『徳』

子どく人

はじめの言立、同事。シテへあど／＼申所に、はや／＼御立まんぞく申候。此さんば

『30ウ』



ざるがくほどもめでたき物ハ御座なく候。あとへ仰のごとく、いろのくろきぜう殿ほどもめでたい御かたハ御座なく候により、今日の御きたうを仰つけられて候。めでたき御事にてハ候ハぬか。シテハ近頃めでたい事にて候。其上人のたからおゝき中に、子ほどのたからハ御ざないと申すが、何とおぼしめし候ぞ。あとへ中へ。子ほどのたからハ御ざなく候。シテハそうじてそれがしハ子を十人以て候が、五人ハ男子、五人ハ女子にて候。去程ニ一人の(名を)よび候へバあまたの子共こたへ申間、此十人の子共の名を付て候。あとへ何とつけたまひて候ぞ。シテハ物と付て候。

『31オ

あとへ何とつけたまひ候ぞ。シテハおとよ、けさよ、たつまつ、(いるまつ、だんだら、)いなごに、かいつく、ひつつく、ひうちぶくろに、ぶらりと付て候。あとへ「<sup>抹消</sup>あらめでたや」さらばすを参せう。「あらやうがましや」。

ん ほんさん

一、名乗テ出テ、「それがし別而申談人ノほんさんのほしがられました。是非共それがしにもとめてくれよとたのまれ申され候間、方々尋ますれども見事なるが御座ない。爰ニそんじやうたれと申人が御座るが、一だん見事成ほんさんもたれて御座る

ほどに、これを所望いたして彼方へ

『31ウ

まいらせたる存、此中いろく所望申せ共くれられませぬほどに、あんないなしに参てほんさん取て参て、彼方へ進上とぞんずる。シカくいふてまわりて、「急程にこれじや。則浦へまわろう。さてく見事ニふしんせられた。まだへいを付ずによしがきにしておかれた。先かきをやぶろ」。小刀にてなわめ切、めりくとする時、みよをふさいでおどろいてにぐる。にげて、又よつてはいつて、ざしきにありあけとぼし置たる由いふて、方々

『32オ

ほめて、ほんさん見付テ取てのかうとする時、(ていしゆ)余所へ咄ニ行たゞ今帰る由いふて帰て、「やれくざしきニ人音する」といふて見付、「ぬす人が入たる」といふて、「うらおもてへ人まわせ。たいまついだせ」などいふて、たちをぬいてひしめくとき、ぬす人めいわくして、いろくこうくわいすれ共不<sub>レ</sub>及ニ是非ニ、別ニにげ所なく候間、「木かとおもわせう」などいふて、ゆるがぬやうにして居る時、ていしゆ見付、「やれくそんじやうたれじや。いろくニ

『32ウ

なぶつて、なぶりぎりニせう」といふて、「人かとおもふたれば人でハない。いぬじや」。シカく有テ、盗人いぬのなくまねする。なかせてわらふて、「犬かとおもふたればいぬにてハな

い。きつねじや」。又なく。又からすじやといふてなからする。又わらふて、「とびじや」といふて又なからしてわらふて、つめに「たいじや」といふ所で、たいのなく声なきよしひてめいわくする。先あふぎをひろげてしりにそらせてミする時、「さあおはねた」とていしゆいふ。「さて、なき  
『33オ  
そらへ』といふて、ていしゆ笛ノ前へそろくよる時、盗人ハめ付ばしらの方へそろく（「びたく」いふて）にげて、「たいく」といふてにぐる。ていしゆ「やれ盗人よ」とおいこミにする。

しやてい

一、名乗テ出テ、「去方より今日御茶をくだされうずるとある御使じや。さう御座れハ、それがしがしやていもめしつれて参れとの御使で御座るほどに、しやていをめしつれ、きやうだいつれてまいらうと存る。急しやていが所へまいッて  
『33ウ  
同心申さうとぞんずる。急程にこれじや。内ニおりやるか』。「たれじや」といふてしやてい出ル。シカく有テ、「是へくるも別成事でハない。そんじやうたれ殿より、今日お茶をくだされうず。則心安うしやていのおぬしをつれて参れとの御使じやほどに、いざゆかう。』や、なにとおしやるぞ。お茶をくださ

れうずる程にしやていのそれがしをめしつれられいとの御使じやと被仰るか。」「中く。」「さても曲もない事をおしらる。たとい人がさういふと  
『34オ

いふても、こなたのさうおしらるゝものか。さりとしてハ曲も御座らぬ。あにがいもない事をおほせらるゝ。無念くちおしい事で御座る」といふてはらをたつる所で、あに「是ハいかな事。お茶をくだされうとおほせらるゝがはらのたつ事か。」「いや、さうなおしられそ。お茶の事でハおりない。」「何事じや。」「きいた事が御座る。」「何と。きいた事とハ何事じや。」「しやていとハ何やらわるい事じやときゝましたよ。それがしがしらぬと』  
『34ウ  
おぼしめすか。」「やれくあのやうなどんな事をいふ。人のおやハしんぶといふ。はゝハ「ふくろ」ほん儀といふ。あにハしやきやうといふ。おとゝハしやていといふぞやい。あほう。」「いやく、てゝやはゝやあにハしんぶとも「おふくろ」ほん儀ともしやきやうともいゑ、しやていとハいかうわるい事じやときゝましたよ。」「まだあのやうな事ぬかす。さらばわるい事か又おとゝの事か、たれにぞとうてミよ。」「しかととゑとおもやるか。」「中くとゑ。」「さあらばとうてみて、わるい  
『35オ  
事ならバそなたへぞんぶん申さうぞや。」「中く。わるい事ならバいか様にも身に存分申せ。」「さあらばそんじやうたれがか

様の事をよく存られた人じや程にといに行ぞや。「中く、い  
そいでといに行」。「そこにおまちやれ」といふて、一返まわり  
て、あんないこうて、たれニ成共とう。そこでとわれて、おか  
しがッて、「それにおまちやれ、書物見てこう」といふてわき  
へより、「やれくおかしい事じや。そうじて

『35ウ』

あの仁ハ、うわかわハかしこさうに見ゆれ共そのつツとどん  
な仁じやによッて、たれぞなぶッておこさしまッたと見ゑた。  
それがしもなぶッてもどそ。なふくおきくやるか。書物をね  
んノ入て見たが、しやていといふハぬす人のから名也と書付て  
おりやるハ。「されバこそ。それがしが様に存て参た。かた  
じけなふ御座る。さらバ罷帰る。さらバく」といふて、かへ  
るミちく、「はらのたッ事じや。あにじやものとはたそ」『36オ』  
などいふて帰て、あにくあふて、「そんじやうたれにとうた  
れば、しやていといふハぬす人のから名じやとおしやるが、そ  
のやうな事をおしやるものか。弓矢八幡きくますまい」。「まだ  
あのやうなあほうな事ぬかす。おとくの事じややい」。「いや、  
それがしをうつけにめされてそのやうな事おしやる。それがし  
がいつしやていした事がおじやるぞ。そなたこそしやていめさ  
れたハ」。「何とそれがしがしやていしたといふか」。「あふ、し  
やていめされぬか」。

『36ウ』

「いつしやていした。さゆへ」。「しかとゆゑか」。「中く、ゆ  
ゑ」。「いदैいふてはぢかくしよ。先月ノ十五日ニそんじやうそ  
こゑミなく咄ニおじやた時、そなたもおじやたをおぼやた  
か」。「中く、おぼゑた」。「其時とこの上に茶わんがおじやた  
ハ」。「中く、あッた」。「その茶わんのそばゑおよりやて、何  
めさるぞとおもたれば、そろくとひねくりまわいて、人のめ  
をしのんで皆の衆ノミぬまにそろりとふと

『37オ』

ころへ入てふところしやていめされたが、それがしやていでな  
いか」。「やいくおどれ、おれをしやていといわバ、おどれに  
もいふてはぢかくしよがな」。「さあ何成共それがしが身にくも  
りがあらバおしやれ」。「さらバいふてはぢかくしよ。此春そん  
じやうそこへ皆く参て咄た。おぼへたか」。「あふ、おぼへた」。  
「其時振舞過テ、わきざしもあふぎもぬいてねころうで咄て居  
たる時に、わきざしのそばへよッて

『37ウ』

わきざしをこしふところへ入て、(なんぢも)ふところじやて  
いしたるをわすれたるか」。「さあらバとてももの事に、また申て  
はぢかくしましよ」。「さゆへ」。「去年ノ春、そんじやうその所  
よりまだら牛をうッてたもれといふてそなたの所へひいてきた  
るをおぼやたか」。「あふ、おぼへた」。「其牛ノまだらのしろき  
所をすミでひたぬりにぬるほどにく、(まッくろにぬッて)ぬ

りじやていめされたが、それがしやていでないか。』其『38オやうないつわりをぬかす』といふて、おとゝを取て引まわす所で、おとゝはらをたて、「すまふをおとりやろといふ事か。』すまふ成共とろまでよ』といふて所〔符〕で、あにを取てうちたをいて、「見ゑたか』といふていぬる。又あにハうちたおされて、「やい、おどれ、(うちたをされたハ大事ないが)、あにをうちたをいたとゝいまにばちがあたるぞいや』とつむる。

はぎ大名

一、大名出テ、大郎よび出し、「いつ方

』38ウ

ゑぞ花見ニゆきたい』といふて、「東山ノ、西山ノ』といふて談合する所で、大郎申やうハ、「爰ニそれがし別而とうかん仕るものが御座るが、これがいかにも見事成つくり庭をもつて御座る。其上はぎの花の見事成が御座る。殊ニ此比がさかりのよし申程に、是を御らんじられまいか。』一だんの事じや。さらばそれをミに行」。大郎申やう、「さりながら、あのはぎを御覧じ』39オらるゝ衆ハ、ミなく当座をなされます。』「それがしも当座をせう』といふ。「何となされうぞ。』「大きかづきをもつて十ばい斗のふだらバ、当座のくわいをせうまでよ。』「いやくさ様の事でハ御座らぬ。当座と申ハうたの事で御座る。』「さてハう

たをよむ事か。』中く。』うたをよもまでよ。』何とよましられうぞ。』花を見ていまをはじめのこうたうや庭のちぐさもさかり成らんとよも』『39ウ

「いやくそれハじゆんれいうたでこそ御座れ。はぎについてよましらませい。』「それハ成まい。』「いやくやすいうたで御座る。それがしが御しなん申まじよ。』「何といふうたぞ。』

「七ゑ八ゑ九ゑとこそおもひしに、十ゑさきいづるはぎの花かな、とよましられい。』今一度いふて、「七つ八つ九つ時ノはなのあなかな』などゝ、シカく有テ、「いやくこれハおぼゆる事かなるまいほどに行まい』といふ所で『40オ

大郎「是まで御座つて帰らしらるればいかゞニ御座る。なにとがないたさう。おもひだいた事が御座る。お当座をとていしゆが申時、それがしがあふぎを七ゑと申時ハ七ツひろげましよ。

又八ゑと申時ハほねを八ツひろげましよ。九ゑと申時ハ九ツひろげましよ。おもひしに申時ハ、いつもお庭のおもい石をちからもちせよと被仰る。その石をあぐる時の『40ウ

おもいかお仕ろ。十ゑさきいづると申時ハミなひろげましよ。さきいづると申時ちとさきへいづる心持を仕ろ。(又はぎの花かなと申ハ、いつも大郎御茶の通など仕る時ころび候へバすねはぎのびてといふてしからしらるゝ。慮外ながらすねをさし出

しましよ」。「一だん可礼」<sup>〔然る〕</sup>とて行。彼方へ付、ていしゆよび  
 いたす。ていしゆ出て「見ぐるしき所へ忝」と一礼いふ。扱大  
 名、先松をほむる。「五ようか」と言。「中く、五ようにて候」  
 とていしゆいふ。「さてく見事な枝ぶりよな。あのこちの方  
 へかこうだ枝をつんと切て茶うすの引

『41オ

木にしたいな。大郎口ふさぐ。「見事な松じやな。又大名  
 「此はぎの花ハ見事な花な。やい、あの落花したるハそのま  
 せきはんをこぼいたやうな」。又大郎口ふさぐ。「見事やな」。  
 又大名「爰な石ハ海石か」。「中く海石で御座る」。「やれく  
 見事な石やな。あのこちの方なひよつととがた所をうちかいて  
 火打石にしたいな」。又大郎口ふさぐ。爰でていしゆ当座所望  
 する所で、(大名「中く当座をせう。それがしハかくれもな  
 い哥よミです。哥をよまふとおもへバ、かいるのこだぶくろの  
 ごとくにそれがしが哥ぶくろがふつくくとふくる。うたをよ  
 ふできかせう」。大郎方を見る。

『41ウ

大郎あふぎのほね七ツひらく。大名「七つ八つ」。大郎「七多  
 八多」といふ。二度めに「七多八多」と大名いふ。九多とこそ  
 おもひしに、「九つ時に成にけり」。又大郎「九多とこそおもひ  
 しに」。二度めに「九多とこそおもひしに」。十多さきいづると  
 ミなひろぐる。大名「どつとぞはしる」。大郎又「十多さきいづ

る」といふ。大名「十多さきいづると二度めにいふ。爰で大  
 郎いぬる。八幡前のごとくにいろくいふて、みを取」<sup>『42オ</sup>  
 引まわされて、つめハ「物じや」。「何じや」。「物じや」。「物じ  
 や」。「太郎くわじやがむかうずねじや」。「なんでもない事」

わ

さつくわ

「罷出たる者ハ此あたりの者で御さる。此中のあなたこなたのおふるまい、おびた  
 一、大名出テ大郎よび出して、「世間殊外れん哥はやる間、それ  
 しい事で御さる。それ二付それがし近日よしんかうのたう二あたつて御さる  
 がしもちとけいこしたいが、ししやうハたれがよかるぞ」とい  
 が、そうしやうニたのまふおかたが御さないほどニ、のさものをよび出し談合いた  
 ぶ。「されバたれがよう御座ろぞ」と太郎言。とかくそれがし  
 さうとぞんずる。さて大郎よびいたす」。  
 の無調法な事をたけんニハはづかしいほどに、なんぢハ都への  
 ぼり、おぢである人をようで

『42ウ

こい。おぢである人にけいこせう。「御意尤で御座る。おぢご  
 さまが御ししやうニ一だんよう御座ろ」。「やい、おぢである人  
 へいていおふずるハ、こゝもとニ殊外れんがどはやりまして、  
 爰にてもかしこにてもれんがばかりで御座る。さやうニ御ざあ  
 れバ、それがしハあまり無調法にて、いづかたにもめんぼくうし  
 ないまするほどに、御太儀ながら早々こゝもとへ御くだりなさ  
 れて、れんがを少御しなんあつてくだされよと申て、則供して  
 くだれ」。大郎へ畏て御座る。しうへもはやいそいでのぼれ。』<sup>『43オ</sup>  
 大郎へ畏て御座る」。シカくいふてのぼる。都へついで、「都

はじめてのぼつて御座る所で、おぢごさまノ御やどぞんぜぬ。

誠ぶ念な事を仕た。都にてハそんじやうどこもとで御座ると申、所をとうてまいらふものを、どこをどことたづねふやうが御座らぬ。や、おもひいだいた事が御座る。都にてハうりたいたいのも又かいたいものも又人にあいたいものも、そんじやうそのおやどハと申てよばわると申。それがしもよばわらうと存る。たのうだる人のおぢごさまのおやどハ、くくく。』  
『43ウ

爰デすツパいづる。「これハらく中にかくれもない心もすぐに御座ない物で御座る。何物哉覽遠国物と見へてわッぱとわめきます。きやつにあたつてミよとぞんずる。なふく何事をわッぱとおしやる」。大郎へこなたの事で御座るか。さつへ中く。

大郎へいや何事も申ませぬ。御めんなれ。さつへいや、先何事をおしやるぞ。承たい。大郎へその事で御座る。是ハおんごくの物で御座るが、たのふだる人のおぢごさまのおやどをたづねましてよばわります。さつへいやい、そちハ太郎くわじやか。大郎へや、なんとしてしらしられた。さつへさてわれハくわほうなものじゃ。』  
『44オ

大郎へ何がくわほうに御座るぞ。さつへいや、それがしハそちがたのふだ物のおぢである。大郎へで御座る。さつへ此ひろいらく中でそのまゝそれがしにあふてあるハくわほうなものでないか。

大郎へ被<sup>レ</sup>仰れバさやうで御座る。さつへ何事もないか。大郎へ一だん御無事ニ御座る。先申上ましよ。たのふだ物申されますハ、殊外あそこもとれんがゞはやりまして、何共無調法ニ御座つてめいわく仕るほどに、はるく御太儀ニハ御ざらふずれ共、早くくだらしられて御しなん被<sup>レ</sup>成て被<sup>レ</sup>下よとの御使で御座る。さつへやれくそれハきどくな事じゃ。まへかどより  
『44ウ

無調法ニあつた程ニ、少心がけられよといふたれど終ニがてんなかつたが、今分別がいたるか。先それがしまで満足してある。さあらバくだろ。大郎へいざおツつけくだらしられい。おとも申さう。ミちくシカく有テ下テ、さつくわ門にまたせて大郎うちへ行、しうにいふ。しうよろこふで「あれ、なんじやつてからおもい出した。おぢぢや人の宿をのするまいが、なんとしてたづねた」。大郎たづねたるさ<sup>ま</sup>いふ、「定て御供ノ物共があまたあるほどに、ひろまへはいらしておけ」。大郎へいや、たゞ一人で御ざる。しうへいやくさ様でハあるまいぞ。ふしんな事じゃ。先ものごしからミよ」。見て、「言語道断の物をつれてうせた。あれハ見<sup>レ</sup>ごいのさつくわといふてらく中ニかくれもないすツぱじや。ミ<sup>レ</sup>ごいのさつくわと  
『45オ

いふ名にしさいある事じゃ。何成共に見るものをこうてとるによつてミ<sup>レ</sup>ごいといふ。又さつくわといふハ、すツパのから名

じや。こゝをもつてミごいのさつくわといふ。ごんご道断のものをつれてうせた。太郎へそれがしハこなたのおぢごさまじやと申て御座ルほどに、それでつれてまいて御座ル。それならバもどしましよ。しうへいやく先まで。惣而あれハすツパなれ共世間ノひろうミてめはつかしい物じや。(其上かゑつてあだをなせバいかぢちや)程に、いかにももてないもどさうほどに、さう心得い。太郎へさらバ其通申ましよ。太郎へさつくわそばへいて、「さてくこゝな人ハ。おぬしハミごいの 『45ウ』  
さつくわといふて、あらけないらく中ニかくれないすツパじやとじやが、ミごいとハめに見る程のものこうて取ニよつてミごいといふ。又さつくわとハすツパのから名じやとじやニ、お主ハおぢご様じやといふてきたの。はつかしうハないか。さッへ(いやそれがしもいなかにおいを一人もつて御ざるが、それがところよりよびニまいつたかとぞんじて、それでまいつて御ざる)。したらいにましよ。「いや、先まちや。御ふるまふてもどさうとおしらるゝ」。(こゝにてまづしる人ニなつて、さてりやうりをゆいつくる)。しうへいやくく大郎、それがしハれうりをゆいつけう程に、なんぢハさつくわとはなせ。ちとくわをゆゑ。たのふだ人ハ何をおすきやるぞなどいふてとハ、鷹をおすきやるなどいふてくわをゆゑ。太郎へ畏た」。さつくわそばへ行

所で、へさつくわ「何を

』46オ

すかしらるゝぞととふ。太郎へ鷹をすかるゝ。此程も鷹野に出られたれバ見事な物をとつたがの。さッへ何をとつた。大郎へいりこ・くしあわびをとつた」。爰でしうよびたつる。しうへ何を取たととハ、がんで鶴を取たなどハぬかしハしをらいで、おのれ、たかゞいりこ・くしあわび取物か。今度とハ小鳥をすかれたなどぬかせ。太郎へ畏た」といふて、又さつくわそばへ行。さッへさて又何をすかしらるゝ」ととふ。大郎へ小鳥をすかれておじやる。小鳥ノ中でも物よ。やぶの中ニちよくとして居る 『46ウ』  
鳥よ。うぐよ」。さッへうぐいすか。太郎へあ、それく。うぐいす。うぐいすをすかれた」。爰で又しうよびたつる。しうへとかくなんぢがやうなる無調法な物をあいさつニ出してハそれがしがめんぼくうしなふ。それがしがいでたいめんせう程に、それがしがぢぎ・さほうのやうにせよ。太郎へ畏た」。それよりいで、くちまねのごとく。つめハ、しうが大郎をうちたをいいてつむれば、又大郎がさつくわを打たをいいて、「ミごいのさつくわミゑたか」といふてつむる也。

』47オ

かうじ

一、大名出て、大郎よびいだし、「此程のかなたこなたのお振舞ハおびたし事ハママでハなかつたか」。大郎へ御意のごとくおびたし事ハママで御座りました。しうへして夜前ハあらけないよいでハなかつたか。大郎へ夜前もかたのごとくよわしられて御座りました。しうへさうであるいやい。しうへして夜前、なんぢにかうじを三ツもたせたが、そのかうじハなにとしたぞ。大郎へ何と、かうじをもたさせられたると御意被成まするか。しうへ中く。大郎へ誠ニ酒のゑい本正わすれずで御座る。夜前程よわしられても

『47ウ』

御失念被成ませぬ。かうじこそもつてもどりまして御座る。しうへそのかうじを急でおこせい。大郎へ其お事で御座る。先三つのかうじをもてとおしられてもたさせられて御座る所で、三つながらくゆわゑりまして、お道具にくゆわゑりつけて、お道具をかたげて御座れば、一つほぞもげが仕つて、ころくくくとこけて御座る所で、それがしが申やうハ、やいくかうじ、がうじ門をいえずといふ事があるに、どこへ行ぞと申て御座れば、かうじも心が御座つて、そのままとまりまして、この葉をたてにつきまして、扱

『48オ』

松葉をやりなきつとかまへて居て御座る程に、やれくなんぢハかうるいなれ共心あつてやさしい物じやと存て、其まおい

て御座る。しうへきてハ其かうじハ其まおいであるか。大郎へ中く。其まおい御座る。しうへして残た二ツのかうじハ何としたるぞ。大郎へ残た二ツのかうじハ物と仕て御座る。最前お道具ニくゆわゑり付たによつてほぞもげが仕たぞとぞんじて、今度ハ二ツながらふところへ入てお供申て御座れば、御門で小者共があちおしこちおし

『48ウ』

おしあいまする程に、ふところがひいやりと仕た。若わきざしなどがさやばしりましたかなど存、ふしんに存て見て御座れば、かうじが一つつぶれて御座る所で、さつとすて御座る。しうへやれくおしい事したな。して残の一つハ何としてあるぞ。大郎へそれについて物がたりが御座る。申あげましょ。爰ニテかうじの語かたる。かたりはてなく所で、しうへしう、それハいわうが嶋のるにんの事、それが此かうじにさしいづる事ハありそむないな。大郎へいや、たとへ事で御座る。しうへ何である

『49オ』

とも、今一つのかうじのあり所急で申せ。大郎へさあらばうたいぶしにかつてとわしられい。それがしもうたいぶしにかつてこたへましょ。しうへむづかしい事をぬかす。さあらばうたいぶしとを。こたへよ。大郎へ畏た。しうへ今一つのかうじをば、何と又したるぞ。大郎へものところそハいたいた。しうへ何と又し



たるぞ。大郎言葉(物)とこそ伺いたいたへ物として御座る。しうへ何としたぞ。大郎へ物と

して御座る。しうへ何としたぞ。大郎へ大郎くわじやが六原へす  
らへ。しうへなんでもない事、あちうせい。大郎へ畏た。』<sub>49ウ</sub>

けから

ぬけがら

一、しういで、大郎よび出して、彼所へ使ニやる。シカへ  
有て、「いつも彼所へ使ニやるれば酒をのませてやられます  
が、今日ハ酒をくれられぬ」といふて、もどつて、「別ニ御用  
ハ御座らぬか」といふてもどれ共、酒をくれられぬ所で又行。  
三度程もどり、三度めにしうがおもひだして酒をのませてや  
る。五はいほどのふで、そののむうちからようていて、ミちで  
ねて居る所で、しう「定而酒ニようていまして。まいつてミ  
ましょ」といふていで、ミて、「つねへおくびやう物じや程  
に、こゝに

』<sub>50オ</sub>

ふりうのめんが御座る。此めんをきせておきましておどしまし  
よ」。おにのめんきせておく。さて大郎めがあいて、「あゝ、い  
こようた。かおがおもばれたような。清水へいて手水つかを」  
といふて、清水へいて、水かゝミをミて、「ようあのしミづニハ  
おにがある」といふて、こわがツて、又ミて、「よくへミれば  
清水ニハないが、おれがおにニなツたげな。よくかなしやな。

此やうなおそろしいかおになつたものをたれがふちせうぞの。  
乍去、なじミのしうじや程に、先たのふだ人の方へ参て、めし  
をもちふてた

』<sub>50ウ</sub>

びやう。もの申ましょ」。しうへたれじや。よ、おそろしや。声  
ハ大郎くわじやへが、そのやうなおにへなつた物をたれがふ  
ちせうぞ。急でもどれ。へいやへ、かまの下の火成共たきま  
しよほどこに、おいてください。しうへいやへ、急でいね。い  
なずハ打きろ」とておいいだす。ぜひに不れ及いんで、なきさ  
けんでなく所でめんがぬける所で、ミてきもつふいて、しうを  
ようできて、「物が御座る」。しうへ何が有。大郎へ物が御座る。  
しうへ物がある。大郎へおにへぬけがらが御座る。しうへなん  
もない事、あちうせい。大郎へ畏た。

』<sub>51オ</sub>

なり上り

なりあがり

一、大名出テ清水へ参。大郎よび出し、つれて行。くらま参り  
のごとくに道具などの事いふ。さて参りついて、つやする。「大  
郎へ番のいたせ」といふ所で、大郎、くらま参りのごとくはら  
たてへおこす。「しゆく坊へハ御座るまいか」といふておこす。  
「しのびにて参た程にしゆく坊へハ参るまい。よく番のいたせ」  
といふ。大郎「宿方へ御座れば御酒の一つもくださるゝに、さ

たのかぎりなる事」などいふて、はらたてゝ又おこす。『51ウ  
 「しゆく坊へ急御座るまいと申て、それがしばかりまいるか」な  
 どいふ所で、大名しかつて、「そこでなんじもつや申せ」とい  
 ふ所で、大郎よろこびて、太刀を、さやをもちてつかがしらを  
 うしろへなし、かたげてねむる時、すっぱいでゝ、いろ／＼な  
 ぶつて見て、竹を取出し、太刀を取て、そのたけを太刀もちた  
 るごとくにもたせておいてのく所で、大名めをあきて、下向す  
 る。一まわりまわりて

『52オ

大郎見付てきもをつぶし、先(竹を)ふいて見る。又まわりてた  
 ゝいて見る。又まわりてはしがりのらんかんにてたゝいて見  
 る。又ためてみつ、いろ／＼して後ニ、大名ニ「〔人の身上の〕(物)のなりあ  
 がると申事御存で御座るか」といふ。大名「中／＼。それへめ  
 でたい事じやハ」。「先山ノいもがくちなわニなりあがる物で御  
 座る」。「中／＼、さういふが、定かな」。大郎「中／＼、必定で  
 御座る。又なりあがる

『52ウ

物が御座る。急のころがおや犬ニほどなふなる事で御座る。又  
 よめがしうとめに(程なふ)なります。是もめでたい事で御座  
 る。又くまのゝ別当のくちなはちと申事が御座るが、御存で  
 御座るか」。「いやしらぬ。語テきかせい」。「先熊野のくちなわ  
 々たゞのものが見ますれば尤くちなわで御座るが、別当のミラ

るればたちに見へますと申。まづそのごとく、こなたの御家  
 ニ物がなりあがり

『53オ

ましてめでたい事が御座る」。「何のなりあがりたるぞ」。「こな  
 たのおたちが物に成て御座る」。へ何に成たぞ。へものに成て  
 御座る。へ何に成たぞ。へ此竹に成て御座る。へなんでもない  
 事、あつちうせい。

やぐ

かうやくねり

一、式人一度ニ出ル。京が先、かまくら跡。ここで行ちがい、京ハはしが京かまくらのかうやくねり、／＼、ねりちがふてこそとを  
 りけり。かまくら正面。

一、「是ハかまくらニかくれもなきかうやくねりの大名人デ御  
 座る。」

『53ウ

都へのぼり天下のおぼへをとらふと存、たゞ今罷上る」。そろ  
 ／＼とぎやくニまわる時、

一、「これハ都ニかくれもなきかうやくねりの名人にて候。か  
 まくらにかうやくねりの上手の御座候由承候間、かまくらへく  
 だり、ねり合、おぼへをとらうとぞんずる」といふてまわる時、  
 行合。両共ニ「松やくさい」といふてはなをふさぎ、都ノ物  
 ハ正面へのく。かまくらハはしがりへのく。そこで

『54オ

たがい言葉をかけて、かまくらハ都にかふやくの上手のある

由き、及て候間ねりくらべにのぼる由いふ。又都のものハかまくらに上手のある由き、ねりくらべに参る由いふ。両共ニこれでたがいに乗て、とゞして居て、かふやくのいげん両共ニいふ。かまくらより先かたる。かまくら殿ノ馬、何共ならぬ口ノつよき馬はなれたる時、此かうやくにてすいよせ、とねりどもにつながせたる由いふ。(馬すいかふやく)。又 『54ウ

京ノ物ハ、禁中ニお庭をつくらせられた時、東山よりあらけなき石を取よせらる。此石ねへふかく入、何共ならぬ時、それがしがかうやくにてすいよせたる由かたる。石すいかふやく。さてやくしゆ、たがいにかたる。

そらとぶどうがめ

海ニすむ鹿

山ニ有くじら

くらげのほね

のミのきば

六月ノ土用ニふりたる雪

か様之なき事いふ。さて後ニ、いざくらバすい合テ、どちらなり共まけた方が弟子ニ成といふて 『55オ

すい合て、一、二遍すい合て、京の物はしがりの所へすい合て、うしろへころぶ。又かまくらの物すい合て、まへころんで、つむる也。かうやくハ、紙を切、ひたいよりはなノさきへさがるやうニつける也。

白楽天ノきりノウたい

一、やらくめでたやくやな。たうどにまさる日のもとなれや、はくらくてんがちゑもかなわず、まづくたうどに、かへるべしとの御事なれば、これまでなりとてまッしやのしんな、く、もとのやしるに帰りけり。

郎

悪太郎

一、はじめハ悪坊ノごとく、太刀以テ出テ、酒ニゑい、おぢノ方へ行。又、酒をのうで、なをくゑいて、いとまごいしてもどり、道ニねテ居る所へ、おぢ出テミテ、坊主ニなして、「なむ阿弥陀仏と名をつくるぞ、ゑい」といふていぬる所で、おきて、あく方ノごとく、めをさまして、シカく有テ、ねぶつ申出る 『56オ

所で、「はわが名をよぶ」といふて、こたふる。ねぶつ申のてうしノごとくニ申て、後ニハせわしく成テ、シテ「げに今おもひ出したり。さてハ六字ノ名がうを」、あどへ夢ニつきたる、シテ「わが名なれば、同音へ今よりハおもひきり、く、たど一しんに阿弥陀を頼ミ、たど一心にミだを頼、念仏 『56ウ申てかへりけり」。あどへなむ阿弥陀。シテへやあ。

## 鶉のまつりノ間

くちのせりふ、くればノ間同前。末社ニも仕候。

一、去間、当社において御神事のかずあまた御座候中にも、今月今日の御神事を、霜月はつう、則鶉のまつりと申て、めでたき御神事にて御座候。其子細ハ、此あたりに鶉のがうと申す所の候。それよりうの鳥を取て、かんぬし神前にいけにへにそなえ候へバ、

『57オ』

しんりよにて彼鳥神前になをり居申候。是一のきどくにて御座候。さあるによつて今日の御神事を鶉のまつりと申て取おこない申候。又いにしへ此所へ大たかとび来り、けてうとなり、たみをなやまし候を、当社明神じんづうの矢を以て彼たかをさんどニいおとしたまひ候。則その羽のおちとどまりたる所をバ、

『57ウ』

はこいのしやうと申候。又すゞのおち  
とどまりたる所をバ、すゞのこほりと名付たまふ。それより当社の御前へハたかきんぜいにて御座候により、今にいたるまでたか一本も不レ参候。惣而当社において御神事の子細、先我等承候ハかくのごとくにて候。

はらたてず

一、あるいハ阿弥陀きやうの、又ハ三ぶきやう、くわんおんぎやう、せいしきやう、じつにぎやう、しんきやう、しくわらくわいきやう、

『58オ』

などノ申きやうこそあれ、もしきやうと申ハおほへませぬ。ツメハ(物じや。何じや。物じや。何じや)。「はらハたノねどがうがにゑる」。なきづめ也。

ばせを

一、か様に候者ハ、もろこしそこのかたわらに住居する物にて候。去程に此あたりに山居したまふお僧の御座候が、ありがたきほけきやうを御どくじゆ被レ成候間、つねに参りちやうもん申候へ共、此程ハおこたり申て候間、

『58ウ』

今日は参り、御きやうをもちやうもん申さバやと存る。此程ハおこたり申て候間、御きやうをもちやうもん申、おてうずをもあげ申さバやと存て参り申て候。何とゆきのうちのばせをのいつわると申すハいかやうなる事ぞ物がたり申せと被レ仰候か。さやうの事ハお僧さまこそ御存あるべきに、我等に御尋ハ、定て御わらいぐさになされう

『59オ』

ずるとおぼしめし承候と存候。乍レ去、御なぐさミにかたはし承候とをり物がたり申さうずるにて候。先ゆきのうちのばせを

のいつわると申すハ、とうの代の事にて御座候に、御門ばせを御てうあいなされ、ていしやうにうへさせて、つねにゑいらんありたると承候。然共此くさ、ふゆハなきものなれバ、何となされ冬のばせをを御覧ありたきとて、

『59ウ』

其頃まきつと申すゑかきの候をめされ、冬のばせをかきたてまつりあげよとせんじ被<sup>レ</sup>成候。まきつ承テ、惣じてばせをと申物ハ、冬ハなきものにて候ほどに、かき申事めいわくニ存候へども、ちよくめに候間ぜひニおよバぬと申て、ばせをに雪ふりつもりたる所をありくとかきあげ申候。御門則冬ハ其絵をかけさせてゑいらん被<sup>レ</sup>成候。さやうの事を、セツ中の

『60オ』

ばせをハまきつが絵、ゑんてんのばいづいハかんさいがしと申て、いつわりのたとへと承及て候。惣じて草木心なしとハ申せ共、じせつをたがゑげそれくの色をあらわすものと見へて候。それをいかにと申に、ふるきしに、ばせをみなふしてらいをきいてひらく、きくわまなこなふして日にしたがッてんげとつくられて候。此心ハ、ばせをと

『60ウ』

申すハかミなりのこゑをきいてまき葉を出し候。又あおいと申候ハ、葉のかげに花をしやうじ、しかも日のめぐるにしたがッて此花葉のかげにかくるゝなど承候。又ハばせをのしよくと申て、まき葉のゑ出るをらうそくにもたとへ申され候。れい

しよくけぶりなふしてりよくらうかわくとつくられたるとも御座候。又ハばせをばいとて

『61オ』

さかづきにもたとへられて候。しめい酒をいんげる事さんせうようにすぎず。されバとうばとやらんにかきたるげに候ばせをのしにいわく、やうきせいください、しうふうせんゑいしづかなりとつくられて候。此しさいハ、よるの雨のばせをおつるハごばんに石をちらすやうなるとの事にて候。秋風にひらめきたるばせをハあふぎのごとしもつくり

『61ウ』

申されて候。惣じてばせをハわかんとも古寺にゑいじたと見へて候。それをいかにと申に、あるしに、みどりハのこるこじのせう。又哥に、古寺の庭のばせをのつ葉をあまたになして秋風ぞふくなど承及て候。惣じてばせをの子細さまく御座有由候へ共、念比ニハ存もいたさず、およそ承候ハ如<sup>レ</sup>此にて候。是ハふしぎなる事を仰候

『62オ』

者かな。さてハばせをのせいあらはれたると存候。是と申も、か様にありがたき御きやうを御どくじゆ被<sup>レ</sup>成候間、ばせをのせいもちやうもん申うかまふずると存、あらわれ出たるとすいりやう仕候。猶々やくさうゆほんをあそばされ候ハ、重而きどく成事も御座あらうずると存候間、いよく御きやうを御どくじゆあらうずるにて候。

『62ウ』

## 東北

一、此所の者とお尋へ、いかやう成御用にて候ぞ。へさて是なる梅をバ何と申ぞとおたづねにて候か。へあれハ和泉式部と申梅にて候。たちより心しづかに御一見候へ。へ御用の事あらハ重而御申候へ。へ心得申て候。へさいぜんのものとおたづねは、いや、さきに梅の名をたづねさせられたるお僧にて候か。何の御用にて候ぞ。へ心得申て候。

『63オ』

さて何事をお尋被<sub>レ</sub>成度候ぞ。へ何と承候ぞ。東北院の子細、又是なる梅を泉式部と申しわれヲ存たらバかたり申せと仰候か。

へ惣じて我等も此所にハ住居仕候へ共、左様の御事ハ皆上つかに御さたある事なれば委ハ存もいたさず候乍<sub>レ</sub>去、さいぜん御用の事を重てうけたまわらふずると申て候に、只今御尋候事を物がたり申さねバ、いかゞにて候間、

『63ウ』

我等のきゝ及たるとをり、かたつてきかせ申さうずるにて候。

へ去程に東北院と申御事ハ、此寺都の牛虎にあたつて、わうじやうのきもんなればとて、東北院とハなされたる由承及て候。

惣じて此寺、もとハ正東門院と申御かたの、すませたまひたる所なる由を申候。其正東門院と申たる御方ハ、仁王六十六代一条の院の御宇に、みだうのくわんばく<sub>ハ</sub>な<sub>ハ</sub>ミ<sub>ハ</sub>ち<sub>ハ</sub>の

『64オ』

きやうと申たる御かたの御そくぢよなるが、一条の院のきさきにそなわりましたると申候。其後一条の院ほうぎよ被<sub>レ</sub>成てより御さまをかゑられ、いんがうをかふむらせたまひ、正東門院と申たる由承候。去間寺と被<sub>レ</sub>成たるハ、六十八代後一条の院の、長元<sub>ゲン</sub>三年かのへむまの年の八月廿一日に正東門院の名をかゑ寺と被<sub>レ</sub>成候て、今にかくのごとく正東門院とハ申候。又『64ウ』人の申され候へ、加茂川と申へ、都の北よりながれ、川の上ハわうじやうのきもんにて、都のうちへながれ入候ほどに、川よげの御きたうの(御)ため、正東門院を寺となしたまひたると申つたゑ候。これハ両せツながら、きもんの御きたうのためかと承及候。又泉式部と申へ、生国ハいなばの国たかくさのこうり、そうミと申在所に、<sub>(の)</sub>ゑちぜんのかミおふゑのまさすけと申人のむすめにて御座候が、一条の院に

『65オ』

つかへたてまつられ候を、しやうれきねん中<sub>ちゆう</sub>にたゞのまんぢうの御てうあいなりしが、満中すさめたまひてのち、藤原のやすまさとつれてたんごの国ゑくだりたまひ、しばらく丹後の国にすミたまひたると申す。其おりふし、幡州しよしや山に、しやうくう上人とてたツとき人の御座候由聞及たまひて、のちの世の事を頼まいらするとて、哥へくらきよりくらきミちにぞいりぬべき

『65ウへ以下数丁欠』

## 〔解 説〕

## はじめに

『祝本狂言集』は、<sup>野上</sup>記念法政大学能楽研究所鴻山文庫蔵の古写本で、成立年代・筆者ともに不明ながら、内容から江戸初期の狂言台本と推定されるものである。本書については「祝本狂言集」のこと——近世初頭の狂言台本——(『観世』昭和61年6月)で、概要の紹介、並びに他台本との内容比較から現存最古の狂言台本である天正狂言本(天正六年入一五七八)の年記があるが、内容的には大永四年入一五二四以後、それをあまり下らない頃のものと橋本朝生氏によって推定されている)と、大蔵流最古の虎明本(寛永十九年入一六四二)、『古本能狂言』・和泉流最古の天理本(正保三年入一六四六)以前。『狂言六義』との中間に位置付けられる台本であることを考察してみた。天正狂言本と江戸初期諸本との間には、かなりの内容的差異があるが、その間隙を埋める狂言台本として資料的価値が高いとの判断から、法政大学能楽研究所の御好意により、その全文を翻刻紹介し、若干の解説を添えることにしたものである。貴重な資料の全文翻印を許されたのみならず、『能楽研究』の誌面まで提供して下さった法政大学能楽研究所に対し、厚く御礼申し上げます。

また、表章先生をはじめ、小田幸子・竹本幹夫・落合博志・坂田友宏・和田嘉宥・山藤良治の諸氏から、判読・校訂・解説

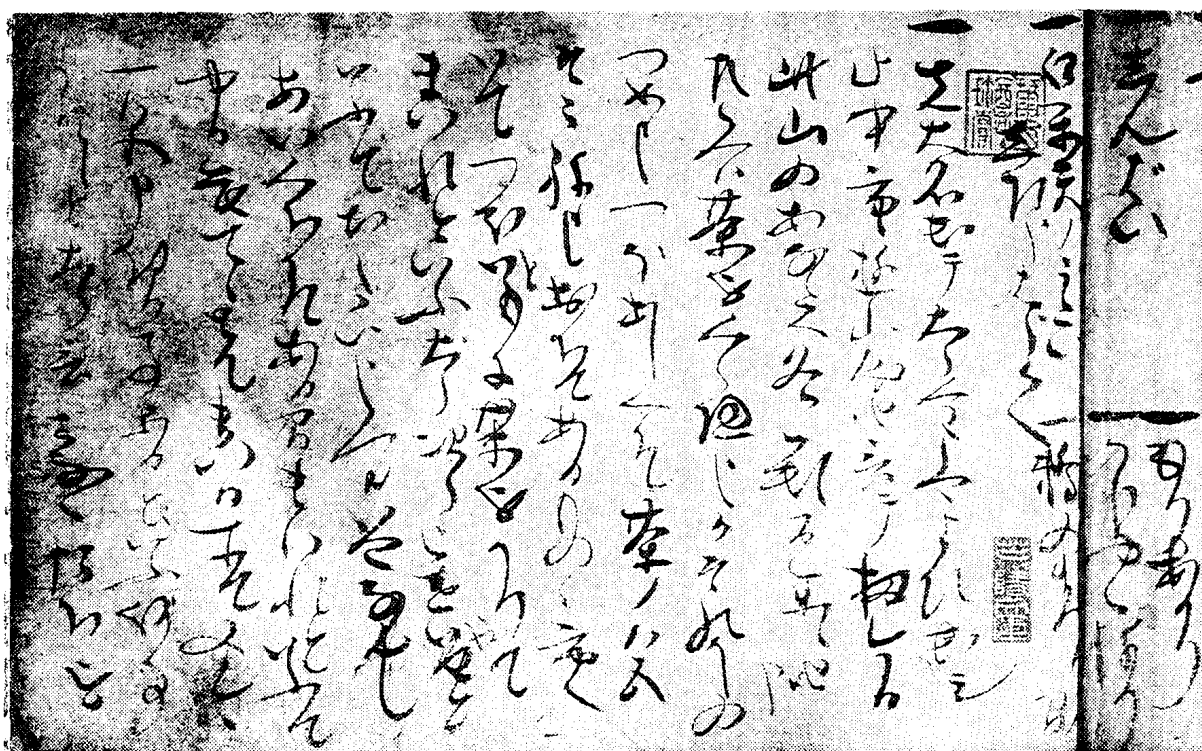
について種々の御助言をいただいた。記して感謝の意を表す。なお、解説には、前稿を『観世』誌に発表して間もなく、追加すべき事柄も数少ないので、多々前稿と重複する個所があるであろうことをあらかじめお断りしておく。

## 一 書 誌

『祝本狂言集』は、写本一冊で帙入り。帙の背に「祝本古狂言写本その他 廿五番」と書かれている。「廿五番」は、目録の番数で、実際は、本狂言二十三曲、間狂言五曲、三番叟の間答一曲の計二十九曲の詞章や筋書を収めている。縦一三四ミリ、横二〇三ミリの中型横本。本文料紙は楮紙。墨付六十五丁で遊紙はない。但し、一丁表は白紙、一丁裏は目録で、本文は二丁表から六十五丁裏まで。本文片面十二〜十四行書きで、一行十五〜二十字前後。表紙は薄茶色で、金銀の切箔を散らしている。表紙中央に金銀の野毛切箔模様のある題簽を貼り、「狂言集」と墨書する。表紙は後人の手になるもので、その裏表紙見返しに「祝姓秘玩」の朱方印が押されている。この旧蔵者名を題簽書名に冠した「祝本狂言集」の名を本冊の仮称とし、他の狂言台本と区別して行く。以下「祝本」と略称する。右の蔵印の他にも、一丁表に「鴻山文庫」印と、「弄月庵函書」朱方印、二丁表に「弄月齋珍賞」朱方印(『祝本狂言集』のこと)では初めの四字分が判読できないとしたが、落合博志氏から、実は三字で、第一字は疑問もあるが「弄」、二字目は「月」、三字目は

「盒(日庵)」と読めるとの御教示を得た)、および「荒陵文庫」の陰刻朱印がある。改装表紙であるのみならず、本の天地が文字にかかるほど切断されており(曲によっては題名の上部に見出しの付箋が貼られているが、それも天の部分で切断されている)、後人によって改装された跡が歴然としている。奥書・年記等は一切ないが、江戸初期以前の書写であることは誰の目にも明らかであるように思われる。

所収曲は凡例に①から⑳の通し番号を付した通り、全二十九曲。内、⑭(愛寿忠信)、⑳(白楽天)、⑳(鶺鴒祭)、㉑(芭蕉)、㉒(東北)の五曲が間狂言、㉓(子徳人)が翁(式三番)の中の三番叟と千歳(上掛りでは面箱持)の問答である。最後の(東北)は途中で終っており、残り数丁が失われていることになる。終りの方の料紙が黒ずんでいることから、かなり早い時期に失われていたと思われる。目録には㉔(悪太郎)、㉕(腹不立)、㉖(芭蕉)、㉗(東北)の四曲が欠けている。これについて『祝本狂言集』の「こと」では、紙面の不足から目録への記載を割愛したものと解したが、一丁裏の目録に曲名が列記されている㉘(膏薬煉)までと、それ以下とは、本文の記載態度や用筆に顕著な違いがあり、内容的にも㉙(白楽天)以下は間狂言が主体になっている㉚までの狂言主体とは異なっている。本来の所収曲は㉛(膏薬煉)までだった余白(十丁余)に、同じ筆者が、何度かにわたって、㉜以下の本文を書き加えたものと考えるのが妥当なようである。本文全体が同筆であることは明確で、目に立つ書き癖の共存がそれを証している。





書写態度は、②④(白楽天ノ切ノ詠)・②⑦(腹不立)のような抜書をはじめとする梗概程度の簡略なものから、②⑧(芭蕉)・②⑨(東北)などのように詳しいものまで繁簡さまざまあり、かなり自由な感じで書かれている。曲の配列も、本狂言の中に間狂言や三番叟の問答が混在しており、分類意識はなく、ただ心覚えのために次から次へ書き留めていったものらしい。他への伝承とか進呈するという目的意識は感じられず、個人の手控本であったと思われる。筆者については一切不明であるが、⑩(子徳人)の最初の「はじめの言立同事」とか、(萩大名)の「八幡前のごとくにいろ／＼いふてみ／＼を取」など、演ずる側からの記述が随所に見られるので、実際に舞台に立った人物、おそらく玄人(もし玄人でないとしても玄人と同格の活動をした人物)の手になるものと考えられる。

凡例でもふれたが、祝本は総じて悪筆に属し、すこぶる読みにくい。癖のある独特なくずしで、字形だけでは判定しかねる文字が多い。ただ、読み慣れてくると、一定の調子を感じられ、かなり文字を書き慣れた人の手に成るらしく思われる。文字遣いには、「上のこわい人」(26ウ)、「取出しま<sup>せう</sup>ずる」(29オ)などの宛字も見られ、後者は開合の混同された例で、室町期までさかのぼる書写ではないことを思わせるが、発音と文字遣いには注意が払われているらしく、促音や破擦音の表記には、稀なる例外はあるが「ッ」に近い字体を用いている。

用語について、既知の狂言諸台本を調査された蜂谷清人氏の『狂言台本の国語学的研究』(昭和53年)の成果に拠りつつ、祝本

を概観しておく。文末表現では「ござる」が主体をなしているが、室町中期頃からの資料に見られる「おりやる」(36オ)も使用われ、室町時代末から用いられたと言われている「おじやる」(11オ・36ウ・37オ)も使われている。「おりやる」「おじやる」にはほとんど用いられなくなった語という。江戸時代の初め頃に一時的に行われた語形と考えられている、「せらるる」の転じた「しらるる」も、「かわしられう」(8オ)・「よましられませい」(40オ)・「しからしらる」(41オ)・「くだらしられい」(45オ)などが見え、また、「させらるる」の転じた「さしらるる」も、「もたさしらる」(2ウ)・「ひろげさしられい」(27オ)などと使われている。同様に、江戸時代初め頃のことばと考えられる、「おほせらるる」と同じく高い敬意を示す「おしらるる」が、「おしられう」(8オ)・「おしられて」(48オ)・「おしらるる」ものか(34ウ)の形で見えているのも、珍しい用例である。丁寧の助動詞「ます」に相当する語として「まらする」(18ウ)、「まする」(13ウ)が使われているが、この併用は虎明本・天理本にも見られ、江戸初期の特徴であるという。意志・推量の助動詞「うずる」も、「申あげうずるにて候」(30オ)・「くだされうずる」(33ウ)などと散見するが、これは室町時代に多く見られ、江戸に入ると急速に衰退していった語である。このように、祝本の用語は、おおむね虎明本・天理本と共通し、江戸初期のことばと推定できる。また、接続詞「したら」がしばしば使用されていたり、「どつく」(28ウ)・「見事な物をとったが

の「(46ウ)・「おにニなッたげな」(50ウ)など、総じて俗語の使用が目立ち、虎明本等と比較すると、より口語的な色彩が強くと、劇言葉としての十分な洗練を受けていない。

祝本の文体上の特色としてあげておかねばならないのが、文末に「所で」を添えて次に続けて行く独特な癖があることで、「ねぎのかぬ所で、山伏ばうにてねぎのそばをどうつく所で、ねぎしてばしらの方へにげる」(28ウ)など、一文の中にいくつも「所で」が連続していることも少なくない。そのため話者・場面などの転換が判然とせず、台本としては不十分なものになっている。こういった記載態度は天正狂言本にも見られ、俗語の使用、江戸期の諸本が「このあたりの者」とする人物を共に「大名」としているなど、祝本と天正狂言本の共通点が多い。祝本は、天正狂言本と同じように、狂言詞章が江戸期諸本のよな形で記載される以前の、狂言の記述の仕方を伝える資料としても興味深いもののように思われる。

## 二 成立年代推定

祝本には、成立年代を示す記述が全くない。従って、それを探っていくためには、内容そのものに手掛りを求める以外ないのである。他台本との内容比較を通して知り得たことは、『祝本狂言集』のこと、また、「各曲覚書」の項に記しておいたので、詳しくはそちらを参照していただくとして、ここでは結論的なことを略述するにとどめる。

祝本の〈附子〉が団円型の留めを有し、〈柑子〉の太郎冠者が三個の柑子のうち二個目まで食べたとは言わぬ点など天正狂言本と近似した趣向を持つこと、〈真奪〉の大名が「道具持せ」と言うのに対し、天理本では「道具の事言べからず」とあること、〈悪太郎〉が先行説話から導き出せる天理本・虎明本の共通祖形に一致することなどから、祝本が天理本・虎明本より古い狂言の姿を伝えていることが確実であり、天正狂言本よりは天理本等に近い要素が多いので、おそらく成立は近世初頭と思われる。三番叟の問答である〈子徳人〉の十人の名が寛永十年(一六三三)刊の『式三番』(鴻山文庫蔵)と一致すること、〈東北〉の詞章が寛永十三年大蔵虎明筆『鬘類註』(『古本能狂言』四所収)と一致し、さらに古態を持っていること、室町末期に成立し、曲名がひんばんに現れるようになるのが金春安照の時代で、慶長十年(一六〇五)の演能記録のある〈鶉祭〉の間狂言を収めていることなどから、祝本の成立時期を慶長から寛永初年頃の間と想定しておきたい。

## 三 旧蔵者祝氏のこと

「祝姓秘玩」の印から知られる旧蔵者祝氏については全く不明であるが、落合博志氏から興味ある御指摘を頂いたので紹介しておく。私信なので一部表現を変えて掲載させて頂く。

祝本にはA「祝姓秘玩」のほか、B「弄月庵図書」、C「弄月齋珍賞」、D「荒陵文庫」の四種の印記があるが、これ

と同一または類似の印記(恐らく同じ人物のもの)を持つ本が鴻山文庫に所蔵されている。上掛り謡本の『道除極観世暮閑筆本』(一40)がそれで、同本には前見返しに、イ「荒陵山房」朱方印、最終丁(奥書のある丁)の表に口「荒陵清秘」の陰刻朱方印、最終丁裏に「鴻山文庫」印のほか、「祝姓秘玩」朱方印ともう一つ文字の代りに絵模様のある朱方印(二)が捺されている。この内のハは祝本のAと同印で、またイと口も印文がDと似通っているので、恐らくは同一人物のものと考えてよいと思う。そして、これら(Aとハ、イ・口とDの二群)が両方に共通して捺されていることから、イ・口・Dの三種の「荒陵」印も恐らくは祝氏の蔵印なのだろうと推定される。残りの祝本BC印については祝氏のものかどうか不明だが、その可能性も少なくないと思われる。ところで、Dとイ・口の「荒陵」印だが、「荒陵」は四天王寺(山号を荒陵山と言う)またはその付近の別称(異称)であり、これが祝氏のものであるとすれば、所持者祝氏は大阪の住人(特に四天王寺近辺に居住)ではないかと想像される。前引『道除極本』の印記の二は変わった蔵印で、寺塔と堂のある風景を描いた絵模様の印(上の方に字があるようにも見えるが読めず)なのだが、或はこれが四天王寺なのかもしれない。

なお、八十島道除が藤堂高虎のお伽衆の一人であったことが、桑田忠親『大名と御伽衆』に見え、「観世宗家所蔵文書目録」七の12(表章氏。『観世』昭和50年9月)でも触れら

れている。(昭和60年7月)

右の落合氏の御指摘によって、祝氏が大阪在住であったらしいこと、祝本の他にも元和五年(一六一九)に八十島道除が極めを加えた観世暮閑筆の謡本(芭蕉)(慶長年間の書写)を所持していたことが判明した。祝本の推定成立年代と『道除極本』の書写年代と重なるわけで、このことも祝本の時代を考えて行く上で参考になることであろう。

なお、狂言の関係者で祝姓の人物がただ一人だけ知られている。文禄二年(一五九三)前後に豊臣秀吉の周辺で活動し、同年の秀吉主催の禁中能でも(弓八幡・芭蕉・三輪)のアイを演じた祝弥三郎(祝丹波・岩井弥三郎)である。彼については片桐登氏の「江戸時代素人能役者考」(『能楽研究』3号。昭和52年)に詳しく、秀吉・秀頼に仕えた武士のようで、素人であった。その祝弥三郎所持の本が同姓の後裔の家に伝わり、江戸中期頃に改装した裏表紙の見返しに後裔が「祝姓秘玩」の蔵印を捺したことも考えられるが、想像の域を出ることではない。

#### 四 各曲覚書

祝本所収の各曲について、他台本と比べ、どういう特色があるかを中心に、そのほか気のついたことを記しておく。

【① 止動方角】祝本の「大名」が虎明本・天理本では「このあたりの者」となっている。虎明本等は、太郎冠者が伯父から茶・太刀・馬を借りて帰ると「遅い」と主人に叱られ腹を立てるが、

祝本では大名は喜んで迎え、太郎は茶壺を持たされたままの腹を立てる。虎明本等に主人の横柄さがよく出ており、太郎冠者が主を馬から落とそうとする心情が納得できる。祝本は大名を馬から落とす回数が他より多く、物真似色の強い演技で観客の笑いをとる行き方と言えるが、人物造型、筋運び等に甘さがある。本文横に一字、二字の文字が書かれている所があるが、いずれも本文が読みにくいための処置で、別筆である。

【② 子盗人】夫婦連れで登場し、茶を飲み近所へ行く祝本の趣向は他に見えぬものである。「祝本狂言集」のこと」では、天理本は母、虎明本は乳母としたが、今回読み返してみたところ両本ともに「女」とのみしか書かれておらず、母か乳母か決めかねる。大蔵流では虎寛本(寛政四年一七九二)岩波文庫、和泉流では波形本(天明六年一七八六)頃で「乳母」となっている。和泉家古本(承応一)元禄頃。日本庶民文化史料集成『狂言』所収)では、「アト初ヨリ舞台へ出テイルモ有 弥右衛門方如此」とあり、当時の大蔵流に亭主も最初から出る場合もあったことが知られる。祝本のような演出をとったのであろうか、それとも名乗なしに狂言座に居たのであろうか。現行(子盗人)でも乳母の名乗がなく唐突にしゃべり始めるといふ珍しい形をとるが、古くは祝本のような亭主の名乗があり、劇的な緊張感を高めるために後から呼ばれて登場するだけになって行ったと考えると、乳母の名乗がないのも故のないことではない。祝本には、「子をうちつけ」などという荒い演出も見られる。

【③ 盗む雁】『狂言記外五十番』(元禄十三年一七〇〇刊)と波

形本以降の和泉流では(雁大名)、その他は(雁盗人)。祝本の曲名は珍しい。内容的には大差ないが、最後の大名が盗んできた物を白状する所で、諸本では帯(袷紗)なのに対し、祝本では「さかしほにせうとおもふてこれをしたわいやい」と言っており、帯などではなく、『狂言集成』の(地藏舞)に出てくるような酒塩にする六条豆腐とか若布といったものが考えられ、雁にふさわしい取合せになっている。

【④ 飛越新発意】天正狂言本では(せいとう)、和泉流の天理本等の古い台本と『統狂言記』(元禄十三年刊)は(飛越新発意)、その他は(飛越)。天正狂言本は江戸期諸本と基本的な部分は一致するが、最初の、坊主が檀那に供を借りに行くところや、最後の、檀那が坊主の「みみをとりに入る」などの荒い留めに特色がある。祝本の最初は、男が新発意に同道を頼むことになっており、江戸期諸本と重なる。留めも、新発意が「ないてつむる」形であり、天正狂言本の荒さはない。祝本の留めは、虎明本の打ち倒された新発意がいざのまま追いつ入るのに比べれば、天理本の川へ落とされ「袖をしぼりて入ル」方に近い。また、祝本で新発意が男に釜の煮える音を「りうくしやぎうゑんば無音」と教えるが、天理本抜書にも「ぎうく車せいゑんろうぶゑん」とあって、両本の近さを感じる。

【⑤ 伯母が酒】祝本の最後は、面を落とした甥を「おばみつけておいこミニする」だが、天正狂言本・天理本では伯母が面をかぶって甥を「おどしかへす」というひとひねりした趣向になっている。天正狂言本・天理本以外の台本は、祝本の留めと同

じ形である。

【⑥ 懐中聲】 天正狂言本の最後で謡曲へ八幡弓のクセと同文句が謡われるが、他には見えぬもので、祝本は江戸期諸本同様「めでたかりける時とかや」を謡う。祝本に引き出物として出された弓を聲が懐中しようとし「はながミのごとくいる」とあるが、天理本にも「はながミ所へ」などと共通した記述が見られる。十五丁表から二十五丁表まで、一部汚損が続き、判読不能の所がある。

【⑦ 賽の目】 祝本は江戸期諸本と筋運びの上では一致するが、一番目の聲入希望者を博奕打としている点、また、最後の「女男ニおわれていぬる」点が特異である。五百具の賽の目の総数を問う中心趣向と博奕打の取り合せがいかにもびったりしており、博奕流行を背景に中心趣向が思い付かれたのかとの思いを抱かせる。祝本の女が男に背負われる演出は、天理本の「むりニおとこをおうて入ル也」と相通じる。他には和泉家古本に「ムリニ男ヲオウテ入」又男ヲダイテ入モアリ―女太郎クワシヤ二人シテ追入モアリ」とあるが、他台本は、いずれも追入りである。祝本へ賽の目へは古い時代の姿をとどめると言える。

【⑧ 饅頭売】 この狂言は、大蔵流(へ饅頭)、『狂言記外五十番』(へ饅頭食)にのみ見えるものである。祝本は虎明本と同様「大名」が出、他の「遠国方の者」と比べると、古格をとどめると言える。祝本は「なきづめ」で、虎明本の「せめて此入ものなりとも持ていなふ。あゝしなひたりく」(『狂言記外五十番』も同じ)の留め方と相通じている。

【⑨ 雁磔】 祝本は「大名」が「上下、大名多ぼし」で出るが、天理本では「此あたりに・かくれもない・あて」、虎明本は「此あたりに住居する者」である。大蔵流では虎光本(文化十四年(一八一七))、和泉流では和泉家古本、波形本に「大名」とある。また、祝本のアドは「此あたりの者」で「田を見舞申さう」と出るが、天理本・虎明本等では急ぎの使いに参る者となり、祝本と同類なのは鷺流の享保保教本(享保初年)享保九年(一七二四)。天理図書館善本叢書『鷺流狂言傳書保教本』で、畑を荒す鳥を追うために登場する。祝本独自の趣向としては、最後に射損なった雁を持ち去られた大名が「やい／＼せめてがんハ及なし。其はね成共くれい。こぎのこニせうニ」と言うが、この「こぎのこ(羽根突き羽根)」は他に見えぬもので、虎明本では「はばうき」、天理本では「ちやはきばね」とある。

【⑩ 附子】 祝本のように「大名」となっているのは、『狂言記外五十番』だけで、他は「このあたりの者」である。最後の泣いている二人の冠者に対し、大名が「別せいばいせうずれ共、せいばいいたすに及べぬ。ぶすをくたらやがてしのぞ。かわいや／＼」と言って立ち去ってしまうのが他に見えぬ演出である。この後、二人の冠者の謡になるが、天正狂言本(附子砂糖)の「ひやうしとめ」と相通じ、天正狂言本と天理本・虎明本との中間形態を示すものと言ってよいだろう。

【⑪ 真奪】 祝本の最初の所で、花の真を取りに出掛ける大名が太郎冠者に道具を持って命令すると、太郎冠者は奥に向って「お道具出せやい」と呼びかけ、他の下人の返事を受けた態で

弓は弦が切れ、槍は柄が折れ、長刀は元からないと答え、大名はしかたなく太刀ばかりを持たせることになる。この趣向について天理本には「道具の事言べからず・太刀をモタスル」とある。このことから、祝本は天理本と同時代かそれ以前の姿を伝えるものと言えるであろう。なお、道具のことを言う趣向は、〈成上り〉にも「くらま参りのごとくに道具の事いふ」とあって、虎明本〈鞍馬参り〉にも見られるものである。

【⑫ 闖罪人】 不採用となる山の趣向として祝本では、竹に虎、龍に雲、滝に鯉(虎明本等にもある)、鶴亀などがあげられるが、この部分は最も流動しやすい所で各流各時代さまざまである。闖取りをする場面で、虎明本・天理本は各々鼓・大鼓・太鼓などの役が当たったと言うが、祝本では皆々「無デ御座る」と答えることになっている。細部に違いはあるが諸本共に大差ない。

【⑬ 禰宜山伏禰宜大黒】 〈禰宜大黒〉という別称、また最後に山伏が「はらをたて、けさははづし、大こくのくびにかけ、あとへ引たをしてつむる」という荒い演出も他に見えぬもので、他本は、大黒が山伏を追い入るとか、禰宜が山伏を追い入る形である。大黒信仰などを無視した場当りの笑いを狙った演出と言える祝本の形は、当時の狂言のありかたをよく示し、この荒さは天正狂言本全体の傾向である荒い演出に繋がっている。

【⑭ 愛寿忠信】 問狂言。〈愛寿忠信〉は、吉野から逃れた佐藤忠信が力寿の家に身を寄せるが、力寿の裏切りを知り、愛寿の所へ忍ぶ。そこに力寿の訴えて討手が押し寄せ、忠信・愛寿ともども自刃して果てるという筋である。力寿御前がアイ。祝本

の力寿の行動は、寛永十六年(一六四二)大蔵虎清筆『間風流伝書』以下、他の問狂言台本と大差ない。ただ、人物造型、演出に多少の違いが見られる。鴻山文庫蔵の貞享鞍貫本(貞享四年(一六八七)では、「後のとがめもおそろしう候程にいたはしく候へ共、上へ申てほうびをとらばやと存る」と幾らかはしおらしい一面も見せるが、祝本ではほうびのみが目的のよう粗野な印象を受ける。また、討手を連れ帰る所では、貞享鞍貫本は「いや／＼いつ／＼に御ざなく候。慥におくの間にをき申て候が是はいかな事、御出あらうずる所をすいりやう申て候」とあるが、祝本は「肝をつぶし、さぐりミて、いやまだ人はだなほどに遠くハ行まじいぞ。こなたへ／＼」と物真似色の強い演技になっている。

【⑮ 子徳人】 これは翁(式三番)の中の三番叟と千歳(上掛りでは面箱持)の問答で、三番叟が揉の段を舞い終えた後、黒色尉の面をつけて千歳と短い問答をかわす、鈴の段への導入部というべき問答である。三番叟の問答には、初日・二日目・三日目、「田歌」などの異なる形があり、その三日目の問答が「子宝」とか「子徳人」と呼ばれている。内容は、十人の子宝にめぐまれた三番叟が子のそれぞれに風変わりな名を付けたことを披露するといった簡単なものである。表章氏が「百々裏話62〜64」(『鍔仙』昭和44年1月〜3月)で紹介された三番叟の問答のうち、十人の子の名が祝本と同じものに鴻山文庫蔵の寛永十年(一六三三)二月刊の『式三番』がある。最初に二人が互いを福人・徳人と目利きし合う所があつて違いを見せるが、名は「おとよ

・けさよ・だんだら・いなごに・たつ松・いる松・かいつく・ひつつく・ひうち袋・ぶらり」とあって、名も順も一致する。慶長頃の原本を写したと表氏が推定されている檜常太郎氏蔵の『秘事集』では「ヲトヤウ・姫ヤウ・松ヤウ・竹ヤウ・ダンダラ・イナゴニ・カイツク・スイツク・ヒウチ袋ト付タ」とあって祝本と重ならない。名前のみだが寛永十年のものと一致し、祝本の時代を考えて行く上で参考になる。

【⑩ 盆山】 亭主が盗人にいろいろな動物の鳴き真似をさせ、あげくに鯛と言つて困らせるが、鯛に至るまでの動物は各流各時代によって異なり、おおむね時代が下ると動物の数が減る傾向にある。祝本で面白いのは犬・狐・鳥の次に鶯がくることで、鶯の真似といえは〈柿山伏〉と切り離せない主要な趣向であり、〈盆山〉が〈柿山伏〉の影響を受けて形成されたことを思わせないでもない。虎明本が動物名を記さず、単に「かき山ぶしの如く」とのみ記していることも、そのことと関連しよう。因みに、虎明本〈柿山伏〉は鳥・猿・狸・犬・鶯の順である。

【⑪ 舎弟】 祝本の最初の兄弟が茶に呼ばれる趣向は他に見えぬものである。他本は、弟がまず出て、兄がいつも「しゃてい／＼」とばかり言うのが気になると、その意味をある人の所へ聞きに行く。この違いは、〈子盗人〉同様、筋展開の上でさほど必要でない部分を削って行き、整備されたのが天理本等に見られる形と考えれば説明がつく。祝本の形を古態と見ておきたい。兄と弟とが互いの盗みをあばきあう所で、脇差を「ふところじやてい」したと言うのは他に見えぬ趣向である。

【⑫ 萩大名】 『狂言記』(万治三年(一六六〇)刊) 以外は、諸本ともに筋運びに大差はない。『狂言記』の大名は、太郎冠者から歌を教えられ、「ふん。してそればかりか」是程のことならば、よもうほどに」と言うだけあって、途中で忘れたりするが、亭主から歌を所望されてすらすらと詠む。太郎冠者に「いづかたへぞいけ」「ゆるり」といて。くつろいでこい」と暇を出した後で、亭主から短冊に書くので「もう一度吟じ。さつしやれませう」と言われ、最後の七文字を失念してしまう。よく出来た構成で、大名の人物造型にも普遍性を持たせている。一つの狂言がさまざまに演じられていたことを示す好例である。さて、祝本であるが、諸本に見えぬ特色がある。太郎冠者に「当座」と言われ「大さかづきをもつて十ぱい斗ものだらバ当座のくわいをせうまでよ」と言い、太郎冠者に「じゆんれいうた」とたしなめられるが、三十一文字の歌を詠むこと、太郎冠者が「七ゑ八ゑ九ゑとこそおもひしに」の「おもひし」を「庭のおもい石」によそえること、亭主に所望された大名が「それがしはかくれもない哥よみです」と答えることなどが、それである。この中で大名が三十一文字の歌が詠めることが気になる。歌を詠んだこともなく砂の名も木の名も知らぬ天理本、三十一文字の歌のことは「聞いた事もない」と言う虎明本のシテに比べ、祝本は一応の知識を持つ者との設定がなされており、それだけに歌一首で苦勞する大名が奇異に感じられる。人物設定が中途半端であり、部分趣向に面白いものはあるが、全体的な構成に対する細かな配慮に欠けている。

【⑱ 察化】 祝本の最初に「大名出テ太郎よび出して世間殊外れん哥はやる間、それがしもちとけいこしたいが、ししやうハたれがよかるぞ」とあり、その横に別筆で「罷出たる者ハ此あたりの者で御ざる」以下、初心講の頭に当たったが宗匠に頼む方がないとの別の名乗りが書かれている。祝本が筆者以外の後人によって使用されたことが知られるが、別筆の方は天理本と重なる（虎明本も「あたりの者」）。後人の手で付記されたものが天理本等に重なることから、祝本はそれらより一時代前のものと考えていいだろう。天正狂言本で「大明」だったものが、江戸期に入って「このあたりの者」「大果報の者」などに變化していることも、その裏付けとなる。筋運びは他本と差がない。

【⑳ 柑子】 太郎冠者が大名から預かった三個の柑子を皆食べてしまつて叱られるという狂言で、太郎冠者のとほけた返答が一曲の焦点となっている。江戸期諸本は三つとも「食べた」と答えるが、祝本では二個までは食べたとは言わず、三個目で窮して「六はらへすら〜」と答える。天正狂言本でも一個目は「こくふにうせた」、二個目は「つぶれた」と答え、食べたとは言わない。〈柑子〉は、〈附子〉同様、天正狂言本との近似が認められるのである。

【㉑ 抜殻】 天正狂言本にもあるが、太郎冠者が殿の命令で花子の所へ酒を届ける途中で皆飲むことになっており、祝本は、江戸期諸本同様、使いに出る前に酒を振舞われることになっている。祝本の留めは主人の叱り留めだが、天正狂言本は「ぬけがらとて見ておどろ。とめ」と留め方は明記されず、江戸初期

台本では主人が外れた面をつけて太郎冠者を脅すと太郎冠者も鬼の顔をして脅し返すという留めになっている。祝本のような叱り留めは、『狂言記』や現行和泉流に見られる。〈抜殻〉は天正狂言本よりは江戸期の台本に近いといえる。

【㉒ 成上り】 鷲流の台本には記載されていない。『続狂言記』（元禄十三年八一七〇〇刊）では〈成上者〉。『狂言集成』（収録台本は江戸後期和泉流三宅派のもの）以外の諸本ともに筋運びに大差はない。『狂言集成』では「太刀が竹に成り上がった」と言う太郎冠者を大名が叱り、それはすっぱの仕業と、二人ですっぱを捕らえようとする〈真奪〉等に見られる結末が加えられている。祝本の特色としては、他本が「このあたりの者」（但し天理本は「一人」としか書かれていない）となっているのに「大名」とあること、また「くらま参りのごとくに道具などの事いふ」とあって、祝本〈真奪〉に見える弓・槍・長刀のことを言う趣向（他本にはない）があったことがあげられる。虎明本〈鞍馬参〉には道具の趣向（弓・鎗・鉄砲）があり、天理本〈鞍馬参〉には「道具の事・云テもよし・いわずも有」と記されている。また祝本〈成上り〉には「しのびにて参た程にしゆく坊へは参るまい」と言う大名に対し、宿坊での酒を楽しみにしていた太郎冠者が腹を立てるといふ趣向がある。これも、「くらま参のごとく、はらたて〜おこす」と記されている通り、虎明本〈鞍馬参〉に見える形である。どうやら、主と太郎冠者が通夜する場合の共通パターンがあったようで、その基本となったのが〈鞍馬参〉のようである。祝本〈成上り〉の通夜する場面で太郎冠者が腹を立てる趣向



があるとするれば、天正狂言本(鞍馬参)の太郎冠者が「つぶてを御ふくといふてだます」ように何か腹いせをする趣向がなくては収まりがつかない。祝本の前段階として、神仏の示験で太刀が竹に成り上ったとだます趣向の欲しいところである。磔・御福を太刀・竹と変えた着想は面白いが、舞台化するにあたっては無理があったようで、すっぱの登場以下太郎冠者の抵抗の視座は狂い、単なる言い抜けに墮してしまっている。祝本の形の登場によって、(成上り)が(鞍馬参)の影響を受けて形成された過程が跡付けられるのではなからうか。

【23 膏薬煉】 祝本では京と鎌倉の膏薬煉が「京かまくらのかうやくねりくねりちがふてこそとをりけり」と二人同吟の次第で登場する。この次第は天正狂言本の他、和泉流の天理本、和泉家古本、鷺流では享保保教本・宝暦名女川本(宝暦十一年(一七六一)頃)・鷺賢通本(安政二年(一八五五))に記載されている。享保保教本に「(大蔵流には)次第ハナシ、又次第ニテ出ルモ有り、其時ハ次第ノ謡替ル、一人宛也」とある如く、大蔵流には見えない形である。膏薬の異験について、祝本では鎌倉の者が馬吸膏薬、京の者が石吸膏薬と言うが、これは天理本・虎明本に共通し、天正狂言本では都の者が舟吸膏薬、享保保教本では鎌倉の者が雁吸膏薬と答える。「祝本狂言集」のことは、(膏薬煉)は天正狂言本より天理本・虎明本の両方に近いとしたが、以上からもわかるように天理本の方に近いので、この場を借りて訂正しておく。

【24 白楽天ノ切ノ謡】 (白楽天)の間狂言の抜書。アイは住吉

明神に仕える末社の神で、日本の知恵をはかるため渡来した白楽天が、漁夫の姿で現じた住吉明神に詩歌問答をしかけて逆により込められて帰国の途に着くとのことを語り、最後に祝本にある切の謡でしめくくる。祝本の詞章は『謡曲大観』第四巻所引の森川杜園旧蔵大蔵流写本(幕末頃写)とほぼ同じ。

【25 悪太郎】 田口和夫氏が「酔狂」『悪太郎』の形成と展開(『狂言論考』所収。昭和52年)で、虎明本と天理本との共通祖型を推定しておられる。それによると、(悪太郎)は『今昔物語集』等に見られる酔婆羅門出家説話に拠って形成されたように、シテが酔って出る虎明本の形が古く、素面で登場する天理本の形は後代の改変とされている。また、虎明本は祝本の本文に続く念仏僧の語りと悪太郎の述懐を持っているが、「互のかたりながく候程に、おどりねんぶつして、其まうたひなしてつめたるがよし」と虎明が言っているように省略可能な部分で、筋展開の上から後代の付加と考えられる所である。天理本のように語り等のない終り方が古いと推定されている。祝本は田口氏が推定された共通祖型と一致し、祝本が虎明本・天理本より古い狂言の姿を伝えている証左となっている。

【26 鶴祭ノ間】 間狂言。アイは「くれはノ間同前」とあるので所の者。「末社ニモ仕候」とあるが、寛永十六年大蔵虎清筆『間風流伝書』を始めとして管見に入ったものはすべて末社である。他台本には、祝本の前半の生贄の鶴が自分から神前にそなわる話はあるが、後半の明神が化鳥となった大鷹を射落し話たはない。能(鶴祭)の本文に関わるのは前半で、後半は関係のない話

である。気多明神に関する伝承に大鷹の話があったのであろうか。竹本幹夫氏の「鶺鴒祭」小考(『鍊仙』昭和55年1月)によれば、鶺鴒祭は金春流独自の曲で、成立は室町末期(遅くとも天正五年までには成立か)と考えられ、鶺鴒祭の名がひんぱんに現れるようになるのは金春安照(一五四九—一六二二)の時代以後のことである。

【27】腹不立】抜書。祝本は、自分達の建てた小庵にふさわしい住持を見付けに出掛けた男達に旅の僧が声をかけられ、「さだめてもし経を御存でござらふ」(虎明本)と問われるのに対して答える所と、名前を聞かれて「腹立てずの正直坊」と答え、疑う二人になぶられると、つい腹を立てて二人に叱られるという留めの部分のみを記したものである。

【28】芭蕉】問狂言。アイは楚国の者。江戸期の問狂言台本で共通するのは、雪中の芭蕉を画くこと(但し正保四年(一六四七)刊『問之本』にはない)ぐらいで、他は「芭蕉無耳聞雷開」の詩句が多く引かれるがこれとてもないものがあり、鶺鴒本本文と直接関係のある雪中の芭蕉さえ語れば後は各流各演者の自由裁量に任されていたらしい。祝本のみに見られるのは、芭蕉盃のこと、芭蕉は扇の如しとのことぐらいであるが、語られる故事、詩句等の数は管見に入った中では最も多い部類に属する。

【29】東北】問狂言。和泉式部が性空上人と出会うところまで。伊藤正義氏の「作品研究『東北』(『観世』昭和51年1月)によると、東北は古くは軒端の梅と呼ばれ、室町末期頃から東北が顔を見せており、この呼称は下掛りにおいて優勢であ

ったとのことである。管見に入った問狂言台本の中では、祝本は寛永十三年(一六三六)大蔵虎明筆の『鬘類註』に最も近い。両本を比較すると(但し『鬘類註』の本文は、祝本でいえば六十四丁表に当たる「去程ニ東北院ト申御事ハ」から始まる)、『鬘類註』が祝本の中から疑問に思われる部分を削った形で、多少の字句の違いはあるが、詞章が一致する。『鬘類註』で削っているのは、「其正東門院と申たる御方ハ仁王六十六代一条の院の御宇に(六十四丁表)」から「正東門院と申たる由承候(六十四丁裏)」まで、六十五丁表の「これハ両セツながら、きもんの御きたうのためかと承及候」、六十五丁裏の「しやうれきねん中にたゞのまんぢうの御てうあいなりしが、満中すさめたまひてのち」といった個所で、明らかな誤伝等を含む所である。祝本を増補と見るか古型と見るか説の分かれるところであるが、祝本の削られた個所が後代の台本に見えぬことなどからは、祝本から虎明本へと修正されたと言えよう。

### 終りに

祝本には、大名をやり込める冠者達の知恵が素直に賞讃されたり(附子)、大名が胡鬼子にするからと雁の羽根を欲しがったり(雁磔)、酒塩の材料を盗んだり(盗む雁)する趣向が見られ、武家の式楽として整備される以前の狂言の具体相をよく伝えている。〈子盗人〉〈舎弟〉の導入部、〈真奪〉〈成上り〉に見られる道具のことを言う趣向、〈盆山〉の鳶の真似、〈賽の目〉に登場する博奕打など、後代の台本が削ったり改変してしまいう趣向

を持ち、狂言の形成展開の過程をたどる上で貴重な資料を提供してくれる。胡鬼子・酒塩を始め、夫婦連れで近所へ茶を飲みに行くとか(子盗人)、田を見回りに行く(雁礫)といった生活に密着した素材・設定があり、「女男ニおわれていぬる」(賽の目)といったただけた結末を持つなど、惣じて世話がかかった演出がとられている。また、山伏が袈裟で大黒を引き倒すとか(禰宜山伏)、「子をうちつけ」る(子盗人)といった天正狂言本と相通じる荒い演出を持つことも祝本の特色である。祝本は、古い狂言が持っていたであろう、天正狂言本的な荒さ、天理本的な世話がかかった演技、場当りのな笑いを狙う演出等々を色濃く残す狂言台本であり、中世の狂言から近世の狂言へと脱皮しつつある転換期の狂言の姿を如実に伝えてくれるのである。

最後に、祝本の系統・流派についてふれておく。他台本との内容比較から言えることは、祝本は天正狂言本よりは江戸初期諸本に近く、江戸初期のものの中では天理本に最も近い。だからと言って和泉流の台本かと言うと、そうは言えない。天理本との近さは、天理本が前代の演出等をよく伝えていたからであるろうし、虎明本との違いは、虎明本に式楽化を目指す当時の大蔵流の規範化・排卑俗の行き方が反映しているためと思われるからである。詳細に見て行けば虎明本の中にも古い狂言の姿をとどめる点が多々あり、それらと祝本の行き方とは決して別種のものではない。そうした事情で、内容の比較によって系統を考えることには限界があり、別の手がかりを求めねばなるまい。

一つの手がかりは、祝本(悪太郎)の謡の部分(五十六丁表)に

下掛りの節付たる「しほる」が使用されていることで、これは同本が上掛りの鷺流系ではないことを物語っている。和泉流も江戸初期には下掛り節付を採用していた(表章氏示教)ので、それだけでは大蔵流系か和泉流系か認定できないが、祝本に金春独自の能たる(鶺鴒)のアイを記載していることを重ね合わせると、祝本の筆者が金春の能のアイをしばしば演じた人物であることが想定される。座付役者と座の結びつきは江戸初期には緩やかなものだったらしいが、特異なアイは座付の狂言方が演じるのが常であったろう。それに、大蔵流と『狂言記外五十番』にしか見られない(饅頭重壳)が祝本に含まれている点などを勘案すれば、祝本は大蔵流系統の可能性がかなり強いのではなからうか。吟味すべきことを多く残してはいるが、虎明本の形に固まる前の大蔵系狂言の様相を伝える台本が祝本であると考えたい。

小山弘志氏の「伊達文庫『古之御能組』と江戸初期の能・狂言(下)」(『東京大学教養学部人文科学科紀要 国文学・漢文学』昭和57年3月)によると、慶長十九年九月に鷺仁右衛門宗玄が観世座付になったのを契機として狂言にも流儀意識が芽生え始め、以前には異流共演の形だったのが元和・寛永になって家ごとに演ずることが多くなり、寛永中期になって台本が流儀としてかなり固まって来るとのことであるが、祝本はまさにその固定直前の、まだ狂言が当代劇としての活力を持っていた時代の姿を伝える貴重な台本と言ってよいであろう。